岩崎　純一　著

『岩崎純一全集』　第四十三巻「社会科学（二の三）」

個人・自然人と国家内生殖的結束人間集団・共同体（恋愛、性愛、男女、家族のうちの夫婦）

編纂、監修　　岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第四十三巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、個人・自然人と国家内生殖的結束人間集団・共同体（恋愛、性愛、男女、家族のうちの夫婦）に関する述作を収める。

目次

巻頭言
第一編　〇歳～十九歳
第二編　二十歳～二十九歳
「共感覚とは、異性を志向する人間生来の本能の名残である」という一つの仮説　～日本人男性共感覚者の知覚の特殊性から～
男性共感覚者としてぶつかる意外な悩み
第　部　岩崎純一さんのお話を聴く会
テーマ：「日本の女性の情緒について」
（編集中）第二部　巫女の歌会における性的秘儀
第三編　三十歳～三十九歳
第一部　私の「対女性共感覚」を原初的「対幻想」と見る解釈について
第四編　四十歳～四十九歳
第五編　五十歳～五十九歳
第六編　六十歳～六十九歳
第七編　七十歳以降
第八編　著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの
第九編　著作権者が岩崎純一であるもの

第二編　二十歳〜二十九歳

「共感覚とは、異性を志向する人間生来の本能の名残である」という一つの仮説　〜日本人男性共感覚者の知覚の特殊性から〜

二〇〇七年六月三日　起筆、擱筆、公開

●先日、F1 モナコ GP を見ていて思い出したけれども、一年前くらいに、「車マニアの男性が車を見ている時の脳を調べたところ、人の姿や顔の表情を見ている時とほとんど同じ反応が起こっている。ところが、そうでない男性の脳には何も起こらない。」という実験データが出たと聞いて、最初は疑似科学かと思ったものの、これこそが実は、男性共感覚者とそうでない男性との脳の違いを物語っていることに気付いて、しばらく注目していたことがある。

本当は、「共感覚者の男性は、車好きになりやすい。」なんて逆転の発想が成り立つんじゃないかと思って、面白がっていたが、最近は本当にこういったことが明らかになってきているようだ。

車のライトを目に見立てて、「この車は笑っている」なんて発想を、小さい頃に持った人もいると思う。それくらいでは、脳が著しく光るなんてことはないし、別に必ずしもライトを顔に見立てているわけでもないけれども、そういうものの極端な延長線上に、僕ら男性共感覚者の知覚現象があると言えなくもないと思っている。

僕も子どもの頃から車好きだが、やはりいまだに車（特に日本車）に対しては、ほぼ全てに色と音と性別があって、日産スカイラインのヘッドライトを見ると C か E♭あたりの音が聴こえ、HONDA NSX の流線形は確か B♭だと思うのだが、どうも最近の新車は、我が心に美しい旋律を浮かばせず、すっかり車への興味が薄れている。共感覚は、不随意的に知覚されるとは言っても、案外個人の嗜好が関係するようだ。車の機能・環境性能は別にして、デザインのみに尋常でない知覚とこだわりを生じさせる脳を持つ男性がいるというのは、実に興味深い。

iki.jpg

●僕は日本の遊郭文化に関心があって、今日も本を読み返していて思い出したけれど、僕が聞いた男性共感覚者の話で、道を歩いていて、今自分が目にしている、数メートル離れた女性の髪を、直接手で触れていないのに、確かに触れたことがある、というものがあった。同じような体験については、このブログからリンクしている N2 さんのサイトでも、ご本人が正直に色々と告白されていて、感心している。

僕はどうかと言えば、実のところ同じように、離れたところから、今自分が見ている女性に、手で触れていないにもかかわらず、触れてしまえることがある。これも、不随意的と言えばそうだけれども、何も道を歩いていて女性を片っ端から触ってしまうなんてわけではない。「君たちは透明のテナガザルか」と驚かれるかもしれないけれども、当人にとっては、神秘体験どころか、実体験である。

他にも体験を語っている人がいるかもしれないが、今のところ、これ以外には聞いたことがない。だいたい、「虫の知らせ」というような日本語自体が、「遠く離れているのに、家族や知人に何かが起こる気がする」という、何かしらの日本人古来の本物の知覚によって生まれた慣用句ではなかろうかと思う。

それにしても、音に色を見る共感覚者の脳で、聴覚野と視覚野が同時に光るように、「遠くから女性を触った」時に、実際に脳の体性感覚野が光っているかどうか、僕は頭に電極を付けて調べる気は毛頭ないので、勇気ある被験者と脳科学者に任せるとしようか・・・。と、それは無責任か・・・。

●日本の雅楽や邦楽の体系が、最初からそういった主観的・絶対的感性を要求して成り立っている音楽体系であることは、驚嘆に値する。西洋音楽で、あれほど簡単に「移調」という概念が生まれて、平均律も隆盛を極めたのに、日本人は陰陽五行説や独特の季節感による調性の禁忌に束縛された音楽をやっていた。十六・十七世紀でさえ、布教に来た外国人宣教師が、ミサで歌う日本人を、「日本人は言うことを聞かん。」と怒ったくらいだから、少なくともその時代でも、日本人は体質からして日本古来の音律体系に絶対的に従っていたようだ。

とにかく、日本の音楽や色彩というのは、そもそも個々人の絶対的な音感や美感を要求する。（西洋音楽の絶対音感ではなくて。）　西洋音楽は、ここ四百年で一気に進化したけれども、日本は少なくとも千四百年前から絶対音感音楽を志向している。江戸の庶民の音楽になって、ようやく相対音楽の文化が芽生えたけれども、それも楽器の都合や、器楽よりも歌を重視したことによる音域制限によるもので、独特の美感は遊郭文化にまで流れ込んで、「あの女は、京紫よりも江戸紫が似合う」などという繊細至極な色彩感覚に昇華した。

こういった日本人男性の色彩感覚は、今ではとても考えられないものだと思う。どうも遊郭文化そのものが、一種の男女の共感覚文化の様相で、僕のような男性共感覚者にとっては実に面白い。そういうわけで、僕はここ一年くらい、遊郭文化における日本人男性の色彩的美感を鋭意探求中である・・・。

jp_era.jpg

個人レベルでは、「子どもの頃は、自覚がないだけで皆持っていたが、大人になるにつれて失う」というのが共感覚の定説なのだから、民族レベルで、「ここ数千年・数百年、あるいは西洋の文化・文明の大流入、近現代社会の生活によって、多くの日本人男性が体質的に、生来の共感覚を急速に喪失した」ということも、十分にあり得る。

むしろ、「特定の少数の男性だけが共感覚を後天的に得る可能性を秘めている」という仮説でもって、「男性共感覚者が、女性共感覚者よりも圧倒的に少ない」理由を説明しようとするほうが、科学的態度としても倫理的態度としてもアウトなんじゃないかと、個人的には思っている。逆に、「これだけ多くの日本人男性が、なぜ、いつどこで共感覚を失ったか」というのが、ここ数年ずっと自分と人の共感覚と向き合ってきて辿り着いた、一つの理想的な視点だと感じている。西洋の男性は、それはそれで、西洋独特の共感覚・色彩感覚・旋律感覚によって西洋の女性を志向する本能を持っているだろう。

●最近、ようやく注目されるようになってきたことだが、日本語のような表語・表意文字中心の言語圏の民族の脳と、アルファベットのような表音文字言語圏の民族の脳とでは、読解・筆記・発語などの際に活動する部位が全く異なっているというもので、これには非常に心躍った。なぜなら、地球上で音波の性質が、極地と赤道での気温差による速さの変化以外には、大きな変化は存在しないにもかかわらず、東洋と西洋の音階理論の間に、なぜあれほどの埋めがたい民族的な差が生じるのかと考えて、それが音波の法則（自然倍音列等）ではなく、日本民族・東洋の民族と西洋の民族との間にある根本的な知覚現象の差によるものだろうと、ずっと考えてきたのだ。

そういう民族の「血」の部分での決定的な知覚の違いが、まさにここ数年で、言語の土俵で鮮明になったことは、かなり賞賛すべきことだと思う。これは、既にディスレクシア克服などに応用されているけれど、今後どうなっていくか、注目したい。

●要するに、人間の知覚というのは、何も自然界に音波や光があるから起こるのではなくて、自分が生まれ持っている性別や民族性や体質に束縛された主観的体験（クオリア）があるから起こっている、つまり、音波や光というのは人間個人の知覚が作り出すものだということを、見せ付けられる。

日本人男性が、もし本当に共感覚を身に付けやすい民族的体質を持っているのだとしたら、実に感慨深い。まだまだ提案したいことはあるし、概論しか書けなかったけれども、とりあえず、こういった視点は、マイノリティになっている今の僕ら日本人男性共感覚者に

とって、大きな救いだと思う。

男性共感覚者としてぶつかる意外な悩み

二〇〇八年九月二十日　起筆、擱筆、公開

戦前・戦中の大変な時代をご存知の男性の方々からよく言われることで、「君の持っている共感覚、あるいは君の書いていることは、二十代の頃の三島由紀夫と同じ路線だから、共感覚とともに三島由紀夫をも研究しなさい。」というのがあって、同じ路線と言われましても・・・、と苦笑しつつ、それでも、三島由紀夫はどう考えても共感覚者そのものか、他の男よりは圧倒的に共感覚的感性に生きた人なのだろうなというのは分かる。それに、「歌人の塚本邦雄は、あれは共感覚者かどうか、君なりに分析してみてくれ。」とか、「民俗学者の折口信夫は、あれも共感覚者じゃないか。」とか言われると、ああ確かに、などと何でも「共感覚」で見事に説明できそうな気がして、また苦笑する。しかも、とどめを刺されるかのように、先日、僕が呼びかけて開いているいつもの共感覚者の会と違って、いわゆるオフ会というのがあって、それに参加したとき、五十歳ほどの共感覚者の女性から、「三島由紀夫みたいな二十代の男性に初めてお会いできました」などと言われて、こちらのほうがびっくりした。それは、僕にとっては最高の褒め言葉の一つだから、構わないけれど。

http://jp.youtube.com/watch?v=EwUhRRWOwjU（←三島由紀夫の貴重な映像）

それにしても、僕が最近困っている、と言うよりは、考え込んでしまうこともあって、それは三島由紀夫の同性愛についてだ。上記の人々を含めて、共感覚者の男にはやたらと同性愛傾向のある人が多い。だいたい、海外ではすでに、同性愛者の男性が共感覚の自伝を書いたりして、日本で翻訳本まで出てしまった。正直なところ、さすがに自分と全く正反対の価値観を目にし続けると、確固たる共感覚観を持つ僕でも、こういうこととどう向き合っていくべきか、簡単に分かるわけでもない。どう頑張っても逆立ちしても同性愛になることはない異性愛者であり、保守かそうでないかで言えば、むしろ日本国は国内外の同性愛に対して保守的態度をとるべきだと考えているこの僕が、「自分は確かに三島の美学に共鳴する部分があるのかなあ・・・」と自分で気付いている、その面白いギャップ。

しかし最近、大相撲の大麻の一件で考えたことがあって、それは、僕が昨今の同性愛の何に嫌気が差しているかということだ。昨今の同性愛を安易に肯定する周りの異性愛者の男に対しても、全面的に同意できない。それはなぜかと考えた。一言で言うならば、「同性愛のハードルの低さ」に物足りなさを感じるということのようだ。言い換えれば、今の同性愛は「現象」であって、「文化」ではない。ま

してや「同性愛」でさえない。

こういうことを言うと、何やら右や左という二項対立に押し込んで見られないかと不安なのだが、この大相撲の件で一番最初に思ったのは、どうしてどの記者の男も天皇を持ち出さないのかということだった。力士が今回やったことが本当だとして、大麻を吸っているロシア人が裸で日本の国技を戦っている。それが天皇の目に触れる。それがどういうことか、あなた方は考えたことがあるか。そういうことは、誰一人として言わなかった。家庭の長が夫ないし父親であるのと同じで、国技の長（主宰者）というものも明確であるはずなのに、誰も国技の根拠を語らずに国技の語だけを語っているというのが、どうもよく分からない。「日本文化の主宰者である天皇を認めないから国技を認めない」という考え方はあるだろうし、それならばまだ分かる。けれど、問題の力士に対して、あなた方が相撲だと思ってやっていたものは、相撲ではなかったのだから、土俵の土どころか日本の土を踏まないで下さい、と、そう言える日本の男が少なくなったことも、この問題の根底にあると思えてならない。むしろ、悲しいかな、実はそのことがこの問題の全てであり、それを言う記者が一人でもいればよかった。ところが、それがない。全くない。しかも、日本人力士の実情も今はよく分からないので、結局、今の相撲は天皇の目に触れるべきものであるのかさえ、よく分からない。（ちなみに、三島由紀夫は生前、「今の天皇（昭和天皇）は、あるべき天皇の姿ではいらっしゃらないから、自分の思うような天皇にしたい」と明言している。これは最も注視すべきことだと思う。）

僕は幼少時から大相撲ファンで、琴乃若や大善を応援していたが、結局応援していた力士が片っ端から引退して、さっぱり興味がなくなった。昔の相撲はよかった。僕としては、今回の件を見ていて分かったことは、大麻を吸ったのが良いか悪いか、勝手に母国でサッカーをやったのが良いか悪いか、ということ以前に、結局あの三人は血も骨もロシア人男性なのであり、朝青龍は血も骨もモンゴル人男性なのであり、僕は血も骨も日本人男性である、ということだけのような気がする。

そうすると、結局「同性愛」の定義自体も、実に怪しいのだ。三島由紀夫や塚本邦雄や折口信夫、ひいては藤原定家や道元や世阿弥などを色々と読んでいると、そういう男が示したある種の同性愛的傾向・民族的連帯あるいは文化天皇としての天皇への崇敬と、僕が幼少時に抱いた「大相撲が自分の国にあることが嬉しい」というある種の感情との間に、いったい何の違いがあるのかと思う。むしろ、「同性愛」という呼称は、古来、こちらに用いられていたものではなかっただろうか。そういう意味では、白洲次郎や黛敏郎なんて、僕には本当の異性愛者であり、「同性愛者」に思える。万葉集の時代には、現代の「友情」に該当するものは存在しなかったと言われる。ことに男においては、それは間違いない気がする。それは裏を返せば、本当の同性愛があったからだろう。もしかして、これらの同性愛的傾

向（ヒトの二つの性を峻別して扱ってこそ明らかになる本当の古代的・日本的同性愛）と、昨今の「現象」としての同性愛（ヒトの二つの性をあやふやにした超越的な性を認める同性愛）とが、一緒くたに「同性愛」と呼称されて扱われていることに問題があるのではないかと思う。

簡単に言うと、日本人の異性愛がしっかりしていない。だから、同性愛の定義自体もしっかりするはずがない。そうなると今度は、性同一性障害の定義との差もよく分からなくなる。しかも、その名には「障害」の語が入っている。「うつ病」が本当に「病気」なのかどうかと同じで、「性同一性障害」も「障害」かどうか分からない。それが障害だという発想は、近代に欧米の科学者の中から生じた。ところが、それが「障害」であるという発想を、なぜ簡単に日本人が受け入れたか。それは畢竟、巡り巡って日本人の日本的な異性愛が崩壊しているからだということになる。だから、「日本の男は断固として異性愛文化を守るべきである」と言える日本の男が増えないことには、結局、同性愛自体が救われないと思うのだ。そういうトリックの見落としが「たった数人の外国人の男に対して日本の男が寄ってたかっても断固とした態度を取れないこと」の根本原因であるということに、どうして目を向けないのか、たぶん僕はそこに違和感なり、憤りなり、ある種の「生きにくさ」を覚えたのだと思う。問題の力士もそうだが、今の相撲をとりまく日本の男たちの言動は、日本の男全体、ひいては天皇に対する無礼であると僕はとらえている。もう片方の横綱も、ロシア人力士を復帰させたらどうかと発言したが、それも、優しさから言ったというのは分かるけれども、結局は日本の男と天皇と日本文化に対する無礼なのだということに気付かないといけない。そのあたりをもっと丁寧に考えてほしい。

最近は、テレビにも出ているような有名な教育者などが、「日本人男性は昔から同性愛に寛容だった。ゆえに、今、ただのブームだとか社会現象だと思われがちな同性愛も、どんどん肯定しましょう。」というような主張をしているけれども、その二つの同性愛がどこでどうつながるのかが、どう読み込んでも理解できない。理解できない男性は決して僕だけではないと思うし、それを願う。両者は峻別して語られるべきものだ。そうでないと、世阿弥の花の一つも理解できない。要するに、本当の異性愛者は本当の同性愛者であり、本当の共感覚者であると僕は思う。だから、僕は僕で、対女性共感覚なりその他の共感覚を信念を持って書き続けるだけだと思っている。

第　部　岩崎純一さんのお話を聴く会
テーマ：「日本の女性の情緒について」

二〇一一年八月二十二日　文字起こし、起筆
二〇一二年六月二十五日　擱筆、公開

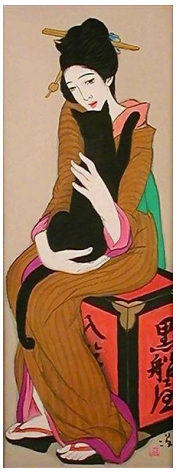
話し手　岩崎純一さん

岩崎純一さんのお話を聴く会「日本の女性の情緒について」　講話録テキスト

※　二〇一一年八月二十二日（月）、二十五日（木）、二十九日（月）に行われた「岩崎純一さんのお話を聴く会」の講話の録音内容です。（主催：「岩崎純一さんのお話を聴く会」）

東京大学生、東京大学大学院生、大妻女子大学生、共立女子大学生、駒沢女子大学生、帝京短期大学生の皆さん、主婦や社会人女性が参加されました。

文字起こし：佐々美世子、東京大学生有志、大妻女子大学生有志



《ブーグロー「渇き」》《上村松園「序の舞」》《竹久夢二「黒船屋」》

★お話内容

ご挨拶

ありがたい勘違い

東日本大震災に関連して考えてほしいこと

「聞いてみたいこと」

摩訶不思議な国、日本

共感覚ブームは少し横において

今の若い女性の自我に特有の苦しみ

紫式部のカロリー摂取、応仁の乱のエネルギー消費

「自分」という概念が時代や国家に負ける時代

「日本の女性らしさ」を見つけてみる
男性にとっての女性の不思議さ
「恋（こひ）」とはどういうものか
男性になくて女性にあるもの
「女性」とは「永遠に手の届かない未知の過去」の名前
『松浦宮物語』、そして、「天城山心中」事件
阿頼耶識、「虫の知らせ」
女性の「勘」の鋭さ
日本の女性が感じる「寂しさ」について
上古代の日本の女性の生活
日本の女性の「巫女性」
日本の女性の呪力
『万葉集』に描かれる日本の女性
歌垣・かがい
日本の女性のこれから

「岩崎純一さんのお話を聴く会」（八月二十二日　ご挨拶）

佐々美世子

皆さん、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

今回は、予定しておりましたように、共感覚・和歌・精神病理などの色々なご研究をされていて、ご自身も不思議な共感覚を持って生活していらっしゃる岩崎純一さんのお話を伺います。

この中にはもうお読みになった方もいらっしゃるかと思いますが、先日お出しになった不思議なご著書のお話なども、伺えると思います。

皆さんのように、これから人の「命」や「心」に直接触れる職業を目指されている女子学生が一度はお話を聞いておくとよいのではないかと思い、「岩崎純一さんのお話を聴く会」として、この場を数名で企画しました。

岩崎さんのご希望で、社会人女性や一般主婦の目も平等に入れてほしいとのことで、私を含めてそういった方々も何人か参加されているかと思います。

岩崎さん、よろしくお願いいたします。

「日本の女性の情緒について」

話し手　岩崎純一さん

ご挨拶

皆様、はじめまして。岩崎純一と申します。

突然ですが、今、竹久夢二や上村松園などの女性画をお配りしました。西洋画も、ブーグローなどをお配りしてみました。世の中には色々な女性画がありますね。これらの作品も、どれも名作だと思います。これらの作品でも眺めながら、聞いて下さい。

もうすでに、ここにいらっしゃる方のほとんどがご存知と思いますが、レジュメにあります通り、私は普段、仕事をしながら、私自身の持つ「共感覚」という感覚世界を主に探究しております。ウェブサイトもやっておりまして、そこでは「共感覚」以外にも、「和歌」や「精神疾患」などの話題を扱っております。

ここにいらっしゃる皆さんの多くは、女子大学という場に身を置いていらっしゃるわけで、日本文学、家政、幼児教育、看護など、ともかく「人間」「女性」「子ども」「命」「心」、そういった話題にまつわる勉強を頑張っていらっしゃるわけです。

そんな中、それらの話題を通じて私のサイトにお出で下さって、私の著書を読んで下さった皆さんのうちの何人かの方から、「岩崎さんのお話を聴く勉強会をしたいのですが」と誘っていただきまして、今日ここにお邪魔させていただいたわけです。

私は、サイトで小さな勉強会もひらいているのですが、全くしっかりした運営ができておりませんもので、逆にこのようなまとまった機会を設けて下さって、嬉しく思っております。

最初は躊躇したのですが、女子大生の方々ということで、かえって我々男性の知らない世界と申しますか、着物サークルや華道サークルの中で、別々の女子大生どうしの横のつながりもあり、学生と社会人と地域の小中学生との縦のつながりもごく普通にあって、本当にまじめな勉強の意味で私を呼んで下さったのだなと知って、ありがたく思っています。

皆さんは日々、男性の先生方からも色々なことを教わっていらっしゃるわけで、こうして一人の男性の弁舌をお友達と一緒にお聴きになるのは特別なことではないでしょうし、そういう空気にも慣れ

ていらっしゃる方が多いと思いますが、私は、こうしてたった一人で女性の方々ばかりに何かをお話したりお伝えしたりするということに慣れておりませんので、かなり緊張しております。

元よりそのような話術も持っておりませんが、何か伝わるものがあれば嬉しく思います。どうぞよろしくお願いいたします。

ただし今日は、大学などから講義を頼まれた時のように壇上から皆さんを見下ろすような状況ではなく、お話会という形で、お食事・お茶もあるとのことで、かえって気が楽です。

大学の先生方から招かれる形で講義をする時には、「岩崎さんのお話を聴いてレポートを書きなさい」という課題が出ることがありますが、今回はそういった課題を出すわけではございませんので、気を楽にして聞いていただけると嬉しいです。

私はまだ二十九歳ですから、二十代ということで、皆さんと仲間ですね。十代の方もいらっしゃいますか。どうか、もう二十九歳か、などと笑わないで、仲間に入れて下さい。

中には、もう恋人さんがいらっしゃる方、ご結婚されている方もいらっしゃるようですね。本当は、同性の方の目が入るのはいいことですし、一緒にお越しいただいてもよかったのですが。

と申しますのも、ご存知の通り、私のその著書のタイトルは、『私には女性の排卵が見える』というものです。タイトルの通り、私の持っている、あなた方女性のいわゆる生理現象、つまり排卵や月経が色や音で見えるという感覚について、書いております。

サブタイトルには「共感覚」とあります。「共感覚」と申しますと、普通は「文字や音に色が付いて見える」というので有名な用語と概念ですが、私のこの感覚も、「女性から出る色や音でその生理状態が分かることがある」という点で、やはり一種の「共感覚」と言えます。自分では、著書の中でも「対女性共感覚」と名付けました。

このタイトルや帯の文句は、担当の女性編集者お一人が決定されたものではなくて、最終的には、編集長や営業の方々のご意向で決定されたものと伺っております。元々私が下書きしていたタイトルは、『ある日本人男性の独白』などという、あまりパッとしないものでした。

最初はかなりとまどいましたが、しかし、「このくらいの衝撃的なタイトルでなければ、逆に男性の目にも女性の目にもとまらないで

しょう」という知人からのご助言もありました。出版社の方々も真剣に考えて下さいました。

たった一つだけ、もし女性の方々が読みたいとお思いになって本屋さんのレジに持っていったときに、どんな気分だろう、というのが、ずっと気になってはいました。

著者の私がどう見られるかが気になったのではなくて、気分を悪くさせたら申し訳ないなという思いでした。女性の読者の方々にとっては、やはりショッキングなのではないかと思いました。

そうこうしているうちに、「本当に買いたい人は、男性だろうが女性だろうが買うわけだし、最近は本なんてネットでも買えるでしょう」と知人からあっけなく慰められまして、確かにそんなものだなと思いますし、今やあまり気にしなくなりました。

ともかく、そんな中で、女子大生が読んで下さったというのは、もうそれだけで一つの喜びで、感謝しています。いくら教養や学問の目的とはいえ、あなた方のような方が自主的にこのような本の著者の男性をお呼びになることは珍しいでしょうし、勇気がいったことと思います。ありがたい限りです。

ありがたい勘違い

私がそもそもこの著書を出した理由、と申しますか、このような自分の感覚を告白しました理由は、一言で表すならば、僭越ながら、「今の日本に危機感を覚えているから」だと言えます。本題に入る前に、今からこのことを少しお話させていただこうかと思っています。

私はと申しますと、二十代前半まで東京大学に通っていました。そして、中退しました。

今、自分のやっていることを「研究」ではなくて「探究」と言ったり書いたりすることが多いのは、「研究しています」と言うと、「どこの大学卒ですか」、「どこの先生ですか」、「先生の研究室を見学させて下さい」と間違われてしまうので、それを避けるためという、ただの便宜的な意味からです。

もちろん、毎回説明すればよい話なのですが、それほどいつもよく間違われるのです。この著書が世に出たのは、震災直後だったものですから、特に福島第一原発事故の被災地域、福島県の産婦人科や精神科の医師の方々から、「岩崎先生のお力をお借りして、過剰な放射線を浴びたと思われる地域の女性への偏見・差別をなくす活動がしたい」という依頼が来ているのです。

私にも何かしたい気持ちだけはありますが、敬称としての「先生」はありがたいものの、教員・教職という意味での「先生」ではないから、どうしようもないわけです。

著書にもサイトにも、「私は現在のところ一般人です」と添えてあるのですが、なぜか何かの道の権威と思われて、「先生の研究室や実験機器をもしお貸しいただけるなら、ぜひ共感覚や放射能の研究をしましょう」などというお誘いが来ます。

お気持ちはありがたいのですが、そんな研究室も高価なものも一

つも持っておりません。裸一貫で生きております。

今日のタイトルも、元は「岩崎純一先生のお話を聴く会」だったのですが、恥ずかしいと言いますか、そういう偉大さというのは、少なくとも今回はちょっと肌に合わない気がしてくすぐったかったので、「岩崎純一さん」に変えて下さいよ、と言ったら、あなた方の何人かから少し笑われましてね。笑わないで下さいね。

ちなみに、現在日本には、大学や高校の中退を予防・防止するための色々な機関がありますが、代表的なものに「日本中退予防研究所」という機関があります。中退を止めることをどう言うべきか、「防止」「阻止」「予防」など、色々とあるのでしょうが、とりあえず今は、「中退」は「予防」するべきものだということになっております。「中退予防戦略」なる言葉や概念も提唱されております。

東京大学の男性中退者というのは、日本の教育機関の中退者のうち、政府諸機関やＮＰＯ法人から最も注目されている存在です。東大中退を公表している限り、その後の人生を追跡調査されることがあります。答えなければ、免れることはできますが。

今回の震災でも、福島県などの被災者の方々の身体がこれから数十年をかけて調査されて、そのデータが放射線被害の研究に使われていくことになりましたね。国民の生命・健康を保護できないと、国の威信に関わります。

それと同じで、日本の最高学府と言われる東京大学の中退者は、日本の国益や経済力の衰退に直接影響してくるという心象からでしょうか、特に詳しく追跡調査されています。

東大の女子中退者の場合は、結婚・妊娠・出産という理由が高率ですから、元より中退を「予防」、「問題視」するという発想が与えられにくいわけです。なおかつ、昨今の「女性の権利」や「フェミニズム」の風潮の中で、「女性の大学中退を問題視するのは女性差別だ」と意見する女性の学識者層がいるために、うかつに「女性の中退」の話題に手を出すことができません。

東大の特に文系の男性中退者には、無職者になるか、フリーターになるか、芸術家になるか、東大よりもレベルの高い海外の大学に行くか、行方知れずになるか、仏門に入るか、そういう人が多くて、ごく普通のサラリーマンや政治家や官僚になる人は実は少ないのです。

東大中退と言えば、元ライブドアの堀江貴文氏や、民主党の仙谷由人氏がいらっしゃいますが、これらの方々は「人の目に触れる有名人」のお立場に立たれた方々で、東大の男性中退者では逆に珍しい存在です。

なぜかと言うと、私とは世代が違うということもありますが、「東大中退」は「高卒」だからです。特に、企業から見た心象の悪さは、一般の四年制大学中退者を超えていると思われます。人の上に立つには、私の好きではない言葉ですが、学歴よりもカリスマ性というものが必要なのだと思います。

東大の男性中退者の成績は、東大の非中退者・在籍者と変わらないですが、トップクラスの成績を収めている男子が突如として中退するケースもあります。中退者からすれば、それぞれ個別の自分ら

しい人生であっても、大学側から見れば、頭脳が放出する上に大学の評判が下がるという、嬉しくない痛手であるわけです。

どうして一部の男子東大生がそんなことになるか、むしろ今の若い皆さんのほうが、何となくその気持ちがお分かりなのではないでしょうか。

ところが、高度成長期を満喫して、バブル崩壊と世界金融危機のあおりをあまり受けずに余裕を持って高齢化した大人たちには、どうしてそんな事態になるのか、実感が湧かないということがあるのだと思います。

私などは、サイトだろうと著書だろうとどこだろうと、正直に「東大中退」と書いているものですから、「どうして東大中退なんてことになるのか、そんなことにならないように日本の将来のために協力してほしい」と色々な方々から言われるのですが、ちょっと私の考え方とは異なるところがあるものですから、特に何もしておりません。

ですから私は、大学生の皆さんには、今の日本を生き抜くためのアドバイスはできませんが、大学の中退の仕方、書面の書き方と、大学を中退したらその後どんな事態が待っているかということなら教えてあげられるという、まことに「先生」と呼ばれるにふさわしくない、しかしユニークな「先生」だと思いますので、そんなに偉い人だと思わないで下さいね。

東日本大震災に関連して考えてほしいこと

それにしても、震災関連で、女性の皆さんに特に考えてみてもらいたいことがあります。私のサイトは、あのように色々な話題を扱っておりますから、メールを下さる女性の方々のタイプが両極端なのです。

実に賢くて、感性も知性も豊かな女性の方々からの励ましや応援のメールが、一方の極です。もちろん、多くはこちらの極ですし、男性からのありがたいメールも多いですが、私が皆さんにあえてお伝えしたいのは、女性のもう一方の極です。

最近は特に、あのような震災がありましたから、私のもとに、「先生の共感覚で東北の未来を占って下さい」とか、「先生の超能力で私の体の放射能を取り除いて下さい」などという女性からのメールが来るのです。

中には、「もうすぐ放射性物質の混じった黒い雨が降るので、外に出たくありません」というメールもあります。「あなたの持っている、何だかよく分からないけれど凄い感覚で、私の血液や子宮に放射性物質が入っていないか、感知して下さい」などというメールも来ました。

同じ女性として、皆さんはどうお思いですか。私だってびっくり仰天しますし、唖然としますけれどね、こういうメールは、皆さんのような女子学生からはあまり来ないのです。むしろ、既婚者の女性、更年期や初老期の女性から来るのです。ご本人たちは、ふざけているわけではなく、大まじめにメールしています。

これは、私が著書を出した結果得た皮肉な収穫でした。もちろん、若い女性からも、少しはそのようなメールが来ましたが。

別に、この女性たちは、統合失調症などの心の病の診断を受けた方でもありません。普段は、普通にスーパーに買い物に行ったり、子どもを育てたりしている女性たちです。

それで、このような女性の方々の日常をよくよく観察してみますと、「夫が家に帰ってくると腹が立つ」とか、「何が何だか分からないけれど、すがるものが欲しい。お金でも神でもいいから」とか、「子どもが自分の思うように育たない。殴ってしまいたい」などという初老女性や母親が多いのです。

これは、今の日本の姿そのものだと私は思うのです。皆さんや私は、これから、年金・税金を必死で納めながら、このような不満を抱えて年を取っていく高齢者を直接的にも間接的にも介護していかなければなりません。せっかく人格のすばらしい高齢者も多くいらっしゃるというのに、もったいない限りです。

皆さんは、万引きは誰がしているか知っていますか。未成年者ばかりではありません。万引き検挙数だけで見ても、65歳以上の高齢者がすでに未成年者を越えてしまいました。人口に対する検挙率も、もうすぐ越えるものと思われます。

それから重要なのは、万引きをやっているのは、「お金がある」人、いや、「その現場、スーパーにまで財布を持参している」人が多いのです。信じられますか。経済的理由ではなく、心の問題で窃盗をやっているわけです。かえって、少ない年金で一生懸命に生き抜いている高齢者たちがかわいそうです。

これからは、「お金のない非行少年」ではなく、「お金のある初老者・高齢者」の万引きが増えていく時代です。「戦争を経験したから人の命や一円玉や物の大切さが分かる」という言葉は、結局うわべだけのアフォリズムだったのだと思えてしまいます。そのうち日本は国家・文化ごと倒れるかもしれない。それも夢物語ではないと感じます。

しかし、こういうことは馬鹿にはできないと思います。今の日本人は、ちょっとでも人生の災難に遭うと、こういう方向に行きやすい国民だと思います。原理的には、新宗教の発祥と同じものだと思います。だから、突如として原発全廃運動がこうして始まっても、個人的には何だか信じがたいのです。

昔から信念や知性や学術的知見に基づいて全廃の意見を持っていた人ならいいけれども、突然こんなことになるのは、どうも信用ならないと私は思います。

私は、原発を造った電力会社や国に限らず、戦後の我々国民の意識それ自体が、「占い」のようなものだったと思っています。科学のなかった古代の呪術・魔術よりも、ずっと信用ならない、性質の悪い「占い」のような気がします。

高度成長期に乗っかった一人の夫に不自由なく支えられて、「人間とは何か」、「生きるとは何か」を全く考えてこなかったために、それらを否応なしに考えざるを得ない更年期・初老期になって、突如として襲ってくる自我の葛藤に耐えきれず、自分は何をすればよい

のかが分からず、赤の他人の独身男性である私にインターネットで辿り着き、救いを求めて、先のようなメールを出してしまうのだと思います。

そういう中で、一人の男性として生き抜いて、サイトを運営するのは、大変なところもありますし、不思議な気分ですが、何とかへこたれずに毎日を過ごしております。

「聞いてみたいこと」

今回、私に「聞いてみたいこと」として、前もって書いて下さったご要望の中で多かったのが、「日本の女性のあり方や生き方について、岩崎さんのお考えを聞いてみたい」というものです。もちろん、それを中心に、私なりにお話させていただきます。

しかし、こういう話題には、下手をすると危ないところもあります。今申し上げた震災のとらえ方や原発問題への対応の仕方、つまり、「戦後日本人教」と同じことにならないようにしたい、という気持ちがあるのです。

それに、最近はいくらでもこういう話題は世に出ているでしょう。『女性の品格』という本も出ました。だから、今や誰が言ってもあまり効果なし、とでも言うのでしょうか。そういう気がしないでもありません。

それから、今からちょっと「共感覚」の基礎部分だけお話しますけれども、これは最近のスピリチュアル・ブームや超能力や占いといったものと同じ方向に進んでしまうと大変なことになるのです。まず、「共感覚」という用語自体は、科学・サイエンスの世界で通用する学術用語なのだということを皆で共有しておきましょう、ということです。

しかし、色々言いましたが、今日ここにいらっしゃる方々は、しっかり勉強されている方々ばかりで、その上で私を呼んで下さったわけだから、そんなことはご承知でしょうけれども。

本当は、あなたも、そちらのあなたも、私の著書の内容、私の共感覚のうち「性」に関する能力そのものについて聞いてみたいなとお思いになって、招待して下さったと思うのです。それは、私なりに今日ここに来て、皆さんのお顔を拝見して、重々心に留めています。

つまり、私の持っている、あなた方女性の生理現象、排卵や月経が色や音で見えるという感覚そのものについて、ご興味があると思うのです。

もちろん、この本は、大震災前にはすでに完成しておりましたが、そもそも私がこのような自分の感覚を告白しようと思った理由は、先ほども少し言いましたが、今の日本に危機感を覚えているからです。危機感と言いましても、色々とあるのですが、今日は、先ほど述べましたような女性の方々からの相談メールの内容を拝見していて感じる危機感を念頭に、お話させていただこうと思います。

それから、「聞いてみたいこと」として、「このような感覚の告白がセクハラに当たるのか当たらないのか、自分にはちょっと分から

ないのですが、岩崎さんや出版元さんはどういう判断だったのでしょうか」と聞いて下さった方がいます。

ああ、あなたですか。別に申し出てくれなくてよかったのですけれど。でも、よくぞ聞いてくれました。聞いてくれないと、男性として答えにくいことがあるからです。

出版者様がどういう判断をなさったのかは存じ上げませんが、私自身の考えについて、述べてみますね。

私も一応は、現代に生きる若い男性ですから、もし私に社会的に失うものがあったなら、告白しなかったかもしれません。つまり、もし「捨て身」になれない立場だったら、ということです。いや、本当は「失うものがあったなら」とか「捨て身になれない立場だったら」ではなくて、「女性に迷惑がかかることになるのなら」ということです。

極端なことを言えば、もし世の女性の皆さん方に対して公的・学校教育的な職務を担う立場に私がいたなら、ということです。そんな立場の私が、もし街頭演説や大学の講義で、「あなた方の生理現象が見えます」などと告白したら、ただの奇怪な人になってしまいます。

けれども、今の私は、ある意味では「失うものがない」し、「捨て身」であることができるし、むしろ、そのほうが自分の生き方として合っていると言いますか、本当に生き甲斐があるのです。

しかし、もし社会的に失うものがあったとしても、自分は同じことを言い続けていた人間かもしれないとも思います。

摩訶不思議な国、日本

今の日本、つまりは自分の国に対する私の印象を一言で申しますと、「摩訶不思議な国」だと思います。「間違っている国」と言いたいところですが、私はそれでも「かろうじて」日本が好きだと思い込みたいので、ここでは「摩訶不思議」と言っておきます。「意味不明な国」とも、「変な国」とも、「いったい何がしたいのか分からない国」とも言っておきます。

私は通勤や都内の移動で、よく地下鉄を使います。日本の電車の発着時刻管理の精密さ・器用さは、きっと世界一でありまして、こういうことは日本人が得意とするところです。

ところが、車内の中吊り広告を見ておりますと、量産される女性アイドル、と言うよりは、女子アイドルの肌もあらわな姿が平気で載っております。その中吊り広告の真下で、女子高校生や女子中学生が、いわゆる国際人というものになるため、そして「品格ある女性」なるものになるために、英単語を必死で覚えております。皆さんも私も、そのような世の中に生きております。

ここで言いたいのは、中吊り広告に書かれていることのほうがおかしくて、その他の女性たちがかわいそうだ、などということでは毛頭ありません。そんなことをおかしいと言い始めますとね、実は昭和後期のほうが今よりも激しかったものです。

皆さんはご存知ないかもしれませんね。私も直接は知りません。

皆さんも私も生まれていない時代です。あなた方くらいの若い女性たちが、何も身に付けずに普通にテレビに出て、踊ったり狂乱したりしていた時代でした。医学で使用されるのではない、いわゆる俗世間で使われるような性的な言葉も、あなた方くらいの女性タレントが普通にしゃべっていました。

むしろ、私が言いたいのは、今の日本社会の「風景全体の滑稽さ」です。これは、「倫理上の善悪」の問題ではなくて、「美観」「景観」「風景」の問題だと思います。

それに私は、一部の女性をいじめているのは、我々男性ばかりではなく、半分は女性ではないかという気がしております。例えば、男性の私でさえ言うのがはばかられるような「巨乳ブーム」や「整形ブーム」というのがありますが、あれは、半分は女性自身が始めたブームではないでしょうか。

最近では、巨乳になる方法や整形のコツを書いた本も、女性がモデルになって、女性が書いて、女性が編集して、女性が売っています。プロの女性ばかりかと思いきや、一般の女性も平気で載っています。

今や何を見ようが、男性雑誌にも女性雑誌にも同じように女性の体の話題や夫や妻への悪口の欄が載っているのですから、いくら子どもに「見るな」と注意しても、子どもだって避けようがなく、そんな注意は大人のエゴにすぎないと感じています。

ところで、私は仕事の帰りに、わざと遠回りして、大手町のあたりを散歩してから帰ることがあります。日比谷交差点から日比谷通りを北上しまして、二重橋前駅の上を通過して、大手町のほうへ抜けます。

左には皇居へと続く皇居前広場の緑と濠、右には日本最大のオフィスビル群が見えます。そして、その間には車が行き交い、歩道には家も身寄りもない方々が寝ています。

私はそれらを見ながら歩いていて、涙が出ることがあります。涙を流すために遠回りしていると言ってよいです。全く異質なものどうしが、お互いに全く触れずに、お互いが存在していないかのように、同じ時空間にある。

感動の涙でも同情の涙でもありません。不条理の涙です。流そうと思って流せるような種類の涙ではありませんが、私はこのようなことに涙できる自分が好きです。

そういった世の中を見ていますと、もはや何が善悪で、何が高貴で、何が貧乏で、何がセクハラで、何が痴漢で、何が何やら分からない社会です。皆さんも私も、そういう、わけの分からない社会、意味不明な日本に生きているのだと思います。

電車内で女性に触れるのが「痴漢行為」であるのに、今述べたような電車内の中吊り広告がどうして「痴女行為」でないと言えるのか。皆さんは、そういうことを真剣に考えたことがありますか。

ぜひ考えてみてもらえるとありがたいです。痴漢を不快に思う女性がいるように、昨今の女性自身による性の喧伝を不快に思う私のような男性もいるわけですね。

そういう滑稽さ、不条理さを見ていますと、あなた方女性に対す

る自分の感覚を告白することを、どうしてためらう必要があるのか、いくらしゃべっても今の日本の摩訶不思議ぶりにはかなわないなと、逆に摩訶不思議な思いになったものです。

それに、もうこういう社会になってきますと、例えば「セクハラを防止するためには、かえって性の話題を意識の上に引っぱり出さなければならない」というようなことになってくる気もします。

ドバイやアブダビなどのイスラム教圏の国際都市は別でしょうが、イスラムの奥地などは、今も「性を視覚的には覆い隠しているのに、意識上では引っぱり上げている社会」です。どういうことかと言いますと、女性は目以外の体の部分は覆い隠しているでしょう。覆い隠すということは、性をそれだけ意識しているということです。

日本は正反対です。あのような電車の中吊り広告があり、その他にも強烈に視覚に訴える性的媒体が溢れ返っているのに、誰もそこに触れない。触れないから、過剰に溢れ出して止まらない。止まらないから、今度はそれらを全否定する人が現れる。悪循環です。

私があなた方女性に対する自分の感覚を考える時、いつも思い出す笑い話があります。

つい頼って使ってしまう便利な日本語に、「アレ」という言葉がありますね。一番分かりやすいのは、物忘れや認知症のお年寄りの方に見られる「アレ」です。高齢者の夫が妻に、「おい、お前、わしのアレを取って来てくれ」と言う時の「アレ」です。「アレ」は、「メガネ」だったり「新聞」だったりするわけです。具体的な言葉が思い出せなくて困り果てた時の「アレ」ですね。

原理的にはそれと同じでして、我々一般の倫理ある男性が、「世の中のセクハラや痴漢を阻止しよう。しかし性的な用語を発言したくない」と困り果てた時に、「女性に対して例のアレをするのはやめよう」などと頑張って世間に言ってみても、何のことやら分かりません。まるで江戸時代の滑稽本のようなおバカさ加減が残ってしまいます。

ですから、どうしても「セクハラ」とか「痴漢」とか「性的な嫌がらせ」といった具体的な語を口頭や文章で発言・発信しないと、適切な対応が取れないわけです。

私も、あなた方女性の排卵に色が付いて見えて美しいと思った時に、わざわざ女性に対する極度の配慮をもって、婉曲的に「あなた方女性のアレのアレがアレで美しい」などと言って済ませたとしたら、不親切どころか、かえって気持ち悪いセクハラにもなりかねません。

江戸時代なら、むしろ、そのようなおバカさ加減が好かれて、私は滑稽本の名作者になれたかもしれませんが、今そのような言い方をすると、かえって教育委員会やＰＴＡからお叱りが来そうです。

実は、最初のうちは、サイトも著書の原稿も、そんな言葉遣いや雰囲気を帯びていたのです。笑い話のようですけれどね、そこまで考えて、何とかここまで来たわけです。

そういうことを考えますと、やはり、私がおかしいと感じている今の日本の性に関する風潮、例えば、セクハラや痴漢その他の性犯罪の増加、交際した異性の人数でその人の恋愛の上手さを判定する

ような歪んだ人間観とマスコミの扇動、そういった風潮を阻止するためにも、僭越ながら私のような男性こそ、皆さん方女性の前で、きちんと適切な性的用語を大まじめに使用して自分の感覚能力や考え方を述べる意義があるのではないかという気がしているわけです。

だから、先ほどこの本がセクハラに当たるか当たらないかと問うて下さったあなた。読者の女性の方々の一般的な気持ちを代弁してくれて、私は嬉しかったです。実は私自身にも答えは分かっていないわけです。

あとは、女性の方々がどうお感じになるか、そこに任せるしかありません。今申し上げたことが、私の生き方と言いますか、人間観・社会観だということが言えるだけですね。

今申し上げましたように、今の日本人が見て見ぬふりをしながら実際のところは自分たちだけが楽しければそれでいいと思っている話題を、わざわざ日本人の意識上に吊り上げて語る私のような男性がいてもいいのではないか、ということです。

それでもやはり、私の持っている感覚は、女性の排卵や月経が色や味わいや香気のようなもので分かるというものですし、今回はそれをお話の中に多々入れますので、気分が悪かったら、いつでもおっしゃって下さい。私には決して分からない女性の心もあるでしょうから。

ただし、今回は、「私にはあなた方に色が見える」などとだけお話しても、あまり面白くないかな、と思いまして、そんな感覚・能力を持っている男性の私にとってさえ、「素晴らしい」、「美しい」と思える「日本の女性の感覚や情緒」とは何か、ということを、お話してみようと思うわけです。

だから、「日本の女性のあり方や生き方」というのをちょっと変えて、「日本の女性の五感・感覚・感性・第六感・情緒などの特徴」という内容でお話したいと思います。

共感覚ブームは少し横において

そもそも、「女性の皆さんの体に色が見える」などという私の感覚の呼称は、何でもいいわけなのです。「共感覚」という、流行の用語に便乗しないと、学者や医者に正規の発言、正当な概念として認められないから、そう言っているまでです。

今日は、学生さん方の意志で呼んで下さったわけだから、足かせやタブーというものが全くありません。だから、もっと「女性とは何か」、「感性とは何か」、そういう話題について、思う存分にお話してみますね。

さて、私の通っていた東大についてなのですが、「共感覚」の専門研究機関として、今は日本共感覚協会というのが、東大院生の有志の女性の方によって設立されました。私もそこの会員でして、実験に何度か参加しております。

しかし、私が東大をやめた二〇〇〇年代前半には、共感覚に深い関心のある東大の先生や学生はほとんどいなかったと思われます。少なくとも、私は出会うことなしに東大をやめることになりました。

女子の間では、「私は文字に色が見えるんだ」といった会話はポツポツ聞かれましたが。

私が自分の「音に色が見える」とか「女性に色が見える」といった感覚を「共感覚」と呼ぶのだと知ったのは、東大に入ってからです。これは便利な用語だと思って、大学をやめる直前にはすでに「共感覚」の語を使って先生と会話はしていましたが、そんなに深いところでの会話ではありませんでした。

それが、まさか、たったの数年で日本中の心理学や神経科学分野の人たちが共感覚に興味を持ち始めるとは思いませんでした。

今思うと、私の場合、文字や音に色が見えるだけでなくて、皆さんのような女性に色が見えるなどという摩訶不思議な共感覚がありますから、もしかしたら、それが先生方の好意的な興味を惹かなかった可能性もあります。

しかし、今日は、日本文学や家政学や看護や幼児教育を志す女性の方ばかりですから、やはり、あなた方が女性としての体を持って生まれたというのがどういうことか、考える機会にしてみて下さい。私も、ある程度は、性についての深いお話もさせていただくと思います。

ともかく、私が東大を中退した直後に、共感覚を専門に研究し始める東大の先生が何人か現れて下さいまして、今の日本共感覚協会もできました。それから、京大、早稲田大、法政大、専修大、関西学院大と、次々に共感覚をご自身の研究テーマの筆頭に掲げる先生が現れてきました。

要するに、これがブームというものでしょうね。それで、私のサイトにも色々な先生方から「岩崎さんの共感覚と、脳や身体を研究させて下さい」というご依頼を頂くようになったわけです。

しかし、実験に協力していると言っても、共感覚の研究者のほとんどは女性です。共感覚者に女性が多いということもあるでしょう。研究者ご本人が共感覚者であるというケースも多いです。

共感覚で卒論・修論・博論を書きたいということで、私もその被験者になりましたが、論文をお書きになったのは、ほとんど女性です。次回、専修大学に実験を受けに行ってきますが、こちらも女子学生さんの論文です。でも、皆さんのような女子大の学生たちの共感覚へのご興味の現状は、あまり聞いたことがなかったので、今日こうして直接にお話しできるのは嬉しい限りです。

今の若い女性の自我に特有の苦しみ

そして、先ほど私に「聞いてみたいこと」の欄に書いていただいたことには、実にたくさんの話題がありますね。日本の女性の感性、日本の古典の心、ふるさとの風景、家事の大切さ、女性の健康、子どもとの接し方。

そういう文化・家政・看護方面からの、私の共感覚へのご関心として、今日のこの場があるわけです。私個人としては、このような話題に安らぎを感じてしまいます。

ところで、いつも思うのですが、学校をやめた人に「どうしてや

めたのか」とか、登校拒否の子どもに「どうして学校に行かないの？」と聞く人がいますね。聞きたい気持ちは分かるし、聞くのが駄目とは思わないのですが、逆に、どうして我々現代の人間は学校に行かなければならないと思うようになったのか、そちらのほうが私には不思議です。

実は、こういうテーマは、今日お話しすることと関係があるのです。人間の心や自我は時代が作り上げている部分が多いということです。

白州次郎という男性をご存知ですか。たぶん、皆さんのような今の若い女性であっても、惚れるような男だと思います。この人は、英語圏の人に向かって、「あなたももっと練習すれば英語がうまくなりますよ」と言ったらしいです。

別に英語でなくてもいいのです。日本語能力でも芸術能力でもかけっこでも、家の皿洗いでも掃除でも、何でもいいですが、相手に勝とうと言いますか、相手を上回ろうと思ったら、相手を殴る蹴るよりも、黙って努力して、知性と感性、品格と風格でごく自然に相手を上回る、でも自分ではそれをおごりもしない、というのが、一番魅力的な人間だと思うのです。

寺山修司という人もいまして、この人も「あなたは色々なことをなさっているが、いったい本業は何なのですか」と聞かれて「寺山修司です」と答えたそうです。

そういうことなのです。「どうして東大なんてイイところを蹴ってまで別の人生を進むのか」といつも聞かれるのですが、心の中では、「それは岩崎純一だからです。あなたももっと勉強して東大に合格して、授業に出ずに哲学書でも読めば分かりますよ」としか言いようがないわけです。

今私が言ったことの意味が分かった人は、東大なんて受けなくても、哲学書なんて読まなくても、私の言うことなんて聞かなくても、元々そういうことが分かったでしょう。

だから、今日、皆さんの中には、大学がつらかったり、友達関係がうまく行かなかったり、親から自閉症気味の共感覚者だと言われたり、もっと社交的になりなさいとせかされたり、大学のカウンセリング室に行ってみたり、そういった「女性の精神疾患」の関係でお出で下さった方もいらっしゃるようですが、その悩みの内容について、私としては何も触れないでおきますね。

なぜなら、「大学がつらい」、「仕事がつらい」と言って忍び泣く女性がどういう立派な品性の女性か、よく分かるからです。そういう女性に向かって、社会的・経済的に成功した女性が、「女の生き方何カ条」、「品格あれ」、「バストアップダンス」というような内容の事実上のビジネス書を出す今の日本が、私は個人的には心底嫌なのです。だから、今日はそれとは別の方向のお話をしたいと思います。

人前に出るとどうしても赤面してしまう、お客さんへのスムーズな笑顔や対応ができない、飲み会に参加するのが苦しい、そういう女性たちほど、私にとっては興味ある女性たちです。

本物の「奥ゆかしさ」を教えてくれる女性は、日本からどんどん少なくなっていると私は思います。日本の女性の「奥ゆかしさ」が

どんなものか、私は「奥ゆかしくない」多弁ぶりで今言おうとしているわけです。

と申しましても、私が女性にならないと分からないことは必ずあるはずです。私も今、勉強中なのです。私も一人の男性として、何人かの女性を好きになって生きてきましたし、色々な恋に破れてもきました。反対に、女性の心を傷つけたことも多々あると思います。

そんな中で、不特定多数の女性の皆さんに向かって何かをお話する資格が私にあるのかと、そう思うこともあります。だから、私の話を聞きに来て下さったというだけで、本当にありがたいです。

紫式部のカロリー摂取、応仁の乱のエネルギー消費

さて、本題に入るのですが、先ほど、自我は時代が作るものだなどということを申しました。かなり難しい話で申し訳ないですが、どういうことか。普通なら、「人類の自我なんて昔から変わらないのではないか」とお思いかもしれませんが、ちょっと分かりやすい例を一つだけ挙げておきます。

皆さんは女性でいらっしゃいますが、皆さんの体は、紫式部や清少納言、いや江戸時代の庶民女性たちの体よりも、だいたい一・一倍から一・三倍くらい大きいのです。

そう申しますと、昔も今も身長が高い女性はいるよというご意見も出てくるでしょうが、ここでは同時代の横方向の個体差のお話ではないのです。時間軸方向の経年変化のお話なのです。

《「紫式部」（土佐光起、石山寺蔵）》

身長に一番に目が行くでしょうが、体重だってそうだし、子宮や卵巣の大きさも、それらに生じる病変も、どんどん欧米人女性に近づいていっています。当たり前と言えば当たり前ですね。欧米人と同じ食事を我々が食べるようになったのも、理由の一つですから。

そういう中で、あなた方は、やれ就職活動しろ、やれ結婚しろ、アルバイトを頑張れ、孫の顔を見せろ、年金を納めろ、とせかされたり、毎月毎月自動的に排卵や月経を健気に頑張ってやっているわけです。

それがどんなにすごいことか、涙ぐましいことか、考えてみて下

さい。突然何の話かとお思いでしょうが、例えば、大きなネズミと小さなネズミが、生きていく上で同じ思考をすると思いますか。同じタイプのオスを好きになると思いますか。きっと、違うでしょうね。食べ物の探し方、採り方も違うでしょう。

皆さんは、急速に変化しつつある体で、親や社会の期待に答えようと頑張っている。今や、自分の国の食事、つまり和食のほうが、洋食よりもお金がかかる。しかも、和食の食材がどんどん海外産になっている。お金がなければ、昔から受け継いだ自分の体を保てない。今の日本はそういう国です。

戦国時代の初めに応仁の乱という戦乱がありました。およそ十数万人どうしの兵力で、ちょっと東軍が優勢でして、十年くらい戦ったわけですが、当時の食生活から見て、戦場でだいたい一日当たり一五〇〇キロカロリーくらい摂取できれば、今の我々男性の一日の運動量を維持できた可能性があります。

それに、走り方、山や峠の越え方が違います。皆さんは学校の運動会の行進で、どう習いましたか。両手と両足がそろったら、笑われたでしょう。でも、両手と両足を規則的に交互に動かすのは、西洋人の身体性に基づく力学によって打ち立てられた「歩行規則」なのです。

戦国時代の我々は、ああいう体の使い方はしませんでした。もっと言うと、能でも茶道でも弓道でも、運動会的な身体性と精神性では本髄を達観できないのです。私は和歌も詠んでいまして、良い和歌が詠めるときの一定の姿勢というのがあります。これは、古典に親しんだ年数だけの問題ではないのです。

ともかく、応仁の乱を見ても、エネルギー効率とか、消化のメカニズムが化学的にちょっと我々と違うと考えないと、戦乱に費やしたエネルギーと食糧摂取量が矛盾するわけです。現代の栄養学は、西洋だと近代あたりまで遡って適用できますが、日本だと近世あたりですでに学問として破綻する気がします。

江戸時代の飛脚などは、今の半分くらいの米と野菜と魚を食べただけで、あちこち走り回っています。その走り方は、ナンバ走りと呼んだのですが、当時は絵だけで、映像はないので、動きの再現はうまくいっていないようですけれどね。

明治時代以降に残る記録を辿っただけでも、我々男性の身長は十センチ以上伸びていますし、体の容量が一一〇から一三〇パーセントくらいになっています。応仁の乱の頃は、江戸時代とほとんど変わりません。

今の私くらいの大きさの男性は一日に二三〇〇キロカロリー以上必要ですが、当時の平均だと二〇〇〇キロカロリーもあれば十分すぎるでしょう。それに、米、野菜、魚中心の食事ですから、案外体力が長持ちします。質素な食生活の中、今の我々男どころではない距離を走り回っていました。

「自分」という概念が時代や国家に負ける時代

食材や食事形態や身体の物理学的・化学的構造だけでなく、人為

的な環境の変化や文明形態や社会常識というものが我々の自我を形成する、つまり、外側の社会のほうが我々の「自分」という概念創造の主語になることがあるのです。

美容整形ブームもそうだという気がします。昨日の美人は今日の不美人、今日の不美人は明日の美人かもしれないわけです。せっかく美容整形しようとも、数年後には社会からその顔を貶されているかもしれません。

先ほどの登校拒否の問題もそうです。学校に行かない子を「登校拒否」とは言うけれど、学校に行っている子を「登校中毒」とか「自宅待機拒否」と言ったりしませんよね。

先ほどの共感覚ブームも同じことです。今は共感覚ブームだけれど、どうも私はそのうち終わる気がしているのです。今はみんな、新しい話題だと言って喜んでいますけれどね。ある一つの学術分野が花開いたという意味では、意義はあると思いますけれども。

今日ここに来ましたのは、皆さんが誘って下さったときの観点が、ブーム的なものではないと感じたからです。

極端な例ばかり出しましたが、俗世間のサブカルチャーや美容観だけでなくて、学術の世界も全く同じものと思っておいたほうがよいのではないかと思います。学術どころか、今は国家運営でさえ、一種のブーム感情で動いているでしょう。「こういうマニフェストを作っておけば国民は便乗して票を入れる」と思っている政治家が多すぎる。しかも、そのマニフェストを破る。

だから、皆さんは今苦しいと思いますが、先のことなんて分かりません。もう、今の日本の大人が、一歩間違えば取り返しのつかない国家を作り上げてしまいました。ふるさとや日本食や女性の品性や男の貫録を分かっている一部の日本人だけが残って、日本という国家そのもの、文化体系そのものは、そのうち倒れるかもしれない。

ギリシャは、あれは本当に国家が倒れたようなものですが、日本は下手をすると国家も文化も倒れる気がします。皆さんも、それくらいのことを思って、自分の胸に手を当てて、時には泣きつつも、開き直るくらいの笑顔でいていいと思う。

いや、でも、心優しい人にはそういう開き直りができないのですけれどね。私も、いっそのこと日本を捨てたら、もっと気が楽になるような気はするのですが、どうもそれができないです。

今は原発の問題一色ですが、少し前にアスベスト問題というのがありましたね。世界でいち早くアスベストの危険性を研究・把握していたのは、ナチス・ドイツです。

高速道路という交通上の概念規範も、ナチス・ドイツがこの世に現れなかったら、今も生まれていなかったからもしれません。「低所得者層が自動車で外出できる道を作ろう」という主旨でした。しかし一方で、ナチスが現れたために、多くのユダヤ人が殺されることとなりました。

人類の不条理とはそういうものだと思います。文学や哲学を勉強されている方にはお分かりでしょうが、カミュやサルトルの言う不条理というもののほうが、人間の本髄だと私は思います。

そう聞くと、皆さんの中で今、大学が苦しくてどうしようもない

人も、ちょっとは安堵するでしょう。苦しいのは自分の自我のせいばかりではない。苦しい時代に生きているから苦しいのだ、という面もある。

「日本の女性らしさ」を見つけてみる

さて、余談ばかりでごめんなさい、そろそろ本題に入りますが、今、「ブームなんて一時的なものだ」、「人間は不条理な存在だ」というようなお話をしました。「万物は流転する」という言葉がありますね。そう簡単には片付きませんが、ともかく、そういうようなことだと思って下さい。

しかし、永遠不変の存在があるという立場もあります。欧米社会は、一神教社会です。ほとんどキリスト教です。政教分離とは言っても、アメリカの大統領が神に誓うのですからね。あちらの人々にとって、神とはそういうものなのです。

あまりの世界恐慌ぶりやテロリズムの発生ぶりに、最近は「不可知論者」も欧米で増えているようですけれどね。ともかく、永遠不変の存在を「神」と呼んでいる。

本当は、江戸時代の賢い知識人は、日本古来の神々を「神」、輸入した西洋キリスト教文明社会の永遠不変の超越存在を「天主」とか「天帝」と呼んで、別物であることを強調して記録しています。明治の知識人もそれを分かっている。

内村鑑三や森有礼といった、西洋的思考に強烈に近かった西洋かぶれの人でも、それを分かっている。内村鑑三なんて、全く不思議な人でしてね、クリスチャンであるにもかかわらず、日本国という国家独自の天職を追究することを主張し、二つの「J」を愛する、つまり、「ジーザス」と「ジャパン」を愛する、と宣言しています。

欧米人にとっては、わけの分からない文脈です。「天職」というのは、クリスチャンにとって極めて重い言葉で、個人に付与されるものです。

戦後の我々日本人は、そんな明治から昭和初期の知識人たちの葛藤も意識せず、出鱈目に考えて、どちらも「神」と呼んだので、おかしなことになったのですが、ともかく、西洋では、「永遠不変の存在はある」という考え方が生き方の根幹にある。それはそれで、西洋文明の発展と安定には必要な宗教体系でしょうし、それについては日本は敬意を持つべきだと思います。

日本人の自我は、長らくそんな存在については、思考も言及もしなかった。この中にはクリスチャンもいらっしゃるかもしれませんが、ここでは、「日本人にとってずっと変わらないもの」、「日本人らしさ」というようなことを考えてみましょう。

しかも、皆さんは女性ですから、「日本の女性らしさとは何だろう」、「私たちが日本の女性であるとは、どういう一般性を持つだろう」と考えてみて下さい。

キリスト教の「神」とは言いたくないものの、しかし、「日本人の特性」とか「日本文化の特質」などといった一般化を行いたい、という時に、例えば、自我を西洋の側に一旦立たせるという方法があ

るのです。芸術上で言えば、「ジャポニスム」や「オリエンタリズム」などのように、「イズム（主義）」として呼んでみるわけです。「アニミズム」や「ペイガニズム」や「シャーマニズム」といった語もそうです。ただし、これらはキリスト教側からの侮蔑用語として使われることが多いのが厄介です。

他には、ネイティブ・アメリカンの思う「神」に当たるものを、「大いなる神秘」と言ったりします。「大いなる神秘」というのは、ネイティブ・アメリカンにとって、「我々には土着の神々がたくさんいるという唯一の真実を、神と呼ぶ」という感覚に近いです。まことに上手な言い回しです。

そうなると、今日お話しする「日本の女性らしさ」というのは、ある種の一般化でもありますから、「日本の女性の大いなる神秘」と言ってもよいかもしれません。「日本の女性に見られる一定の美とは何か」などと言ってもよいでしょう。それを、当の女性である皆さんも考えてみて下さい、ということです。

男性にとっての女性の不思議さ

さて、「日本の女性らしさ」とは何か、ということについて、一緒に色々と考えてみましょう。

突然、不思議な話をしますけれども、私がお会いした共感覚者や強迫性障害者の女性の中に、次のような女性が数人います。ある女性はアルバイトをしていたとき、買い物客が入ってきたその瞬間、突然脳裏に、その客に対し数分後にいくらの釣り銭を渡すことになるか、その金額がほとばしることがあったと言います。

また別の女性は、私と同じように普段から音に色が見えたり匂いに色が見えたりすると言うのですが、前を歩いている人が次にどこの道をどの方向に曲がるかということが、前もって色で分かることがあるなどと言うわけです。

さらに別の女性は、数日前から何ともしがたい胸騒ぎを覚えていたところ、ペットの猫が亡くなったと言うのですね。逆に、人の死期を猫が当てるというのは、よく聞きますね。

他にも、地震の前に耳鳴りがしたり、体調が悪くなったりして、どうしようもない不安に駆られることが、彼女たちにはあると言うわけです。今回の大震災でも、本当は前兆を体感した女性や自閉症児がいたのです。体に前兆現象が起こるのは、地震の数分前のこともあれば一週間前のこともあると言います。

皆さんの中には、占いとか、超常現象とか、スピリチュアル・ブ

ームとか、そういったものが好きな方もいらっしゃるでしょうか。

今日はいらっしゃらないかもしれませんが、ともかく、あまりにも怪しい宗教性を帯びていない、皆さんのような純粋で知性のある女性である限り、釣り銭や曲がる方向の例については、「まあ、ちょっと怪しいけれど、あり得るかなあ」と思ったり、猫や地震の前兆の例については、「これならありそうだ」と思ったりするのではないでしょうか。

朝方によくテレビでやっている星座占いなどを見て、ラッキーアイテムを一日身に着けていたりするような方なら、この中にもいらっしゃるかもしれませんが、「星占いも所詮は人間が作った一時的なブーム」だという意識があって遊び半分でやっている女性なら、私も「かわいいものだな」とは思っています。

少なくとも私はその段階なのですが、ともかく、共感覚や特殊な精神症状を持っている女性には特に、そういう、男性から見て不思議な知覚現象を訴える女性は多いわけです。どれが嘘か本当かは、見ていくべきでしょうけれどね。

私にも、そういった感覚が全くないわけではないです。一般の男性よりは五感が非常に鋭敏な男性だと思っています。例えば、いつの日だったか、職場の誰かが、何日後かに職場の鍵を忘れてくるか、あるいは失くすだろうということが前もって分かったことがありました。

どうしてかと言うと、職場の空間がいつもと違って非常に動きの遅い群青色や灰色の曲線に包まれていたために、私には分かったのです。共感覚をお持ちの女性には、色を用いたこういう言い方は、もうお分かりでしょうね。むしろ、楽しいかもしれませんね。

ともかく、この奇妙な色彩は、私にとっては「誰かが何かを身に付けるのを忘れる」という意味を持つ気がしました。色が網膜に見えているわけではなくて、脳裏にほとばしる色覚、空気の流れ方が、いつもとは全く違うという「気」がしたわけです。

どうにも言葉にしにくい感覚で、信憑性も高そうだったので、しばらく気にしていたところ、三・四日後に同僚の女性が朝、私の自宅に電話をしてこられまして、私が鍵を持っていきました。

しかし、こんなことは私の場合、頻繁にあるわけでもなくて、ちょっとした出来事に大げさな前兆があるような時もあるし、大きな出来事なのに前兆を全く感じられない鈍感な時もあるので、あまり自分自身でも理解していないところがあるかもしれませんけれどね。

私は幼い頃、親が「この子の症状は夜驚症というものではないか」と調べてくれたことがあるのです。ところが、いくつかこの「病気」には当てはまらない項目があって、どちらかと言うと、親も私の五感・感覚・知覚・他者察知のあまりの鋭さ、そして泣きわめく様子を、病理ではなくて私の感性ととらえていたこともあって、病院送りにならずに済みましたね。

私としては、大人には見えていない世界と言うか、色や音などが「見えた」時に、ただ強烈な感動や不安から泣いていただけなのです。

だから、「近いうちに地震があるかもしれない」と泣きわめく自閉

症児を心配して、そのお母様がメールをして来て下さったことがあるのですが、その子が泣きわめいて体力を消耗した際の体温調節や栄養・水分補給などについては心配しても、その感性そのものについて叱るようなことはやめたほうがいいと思いますよ、と返信させていただいたものです。

「恋（こひ）」とはどういうものか

一方で、私の著書にも書きましたが、女性の姿や仕草に色と音が付いて感覚されたり、その色や音の変動によって、女性に触れずして遠隔から性周期が分かったりするというのが、私のいわば「対女性共感覚」です。

ご自身の排卵が体感で分かるという女性もこの中にいらっしゃるでしょうが、それが遠方から分かるというのが私というわけです。

本当は、この感覚がどういう感覚かと聞かれたときに、「ただ女の美を感覚しているだけです」と答えたいわけです。しかし、そんな言い方だと通用しないし、あまりに無責任すぎるから、ああいう本を書いてみたわけです。

それにしても、遠方から排卵や月経など、女性の生理現象が感じられる感覚、これを私は、かつての男性がおしなべて持っていた最も根源的な能力の一つかもしれないと思っているのです。それを日本の古語で「恋（こひ）」と言ったのではないかと思います。今のような「恋愛」「love」という意味でなくて。

ちょっと優秀な古語辞典を一冊ひけば、色々と面白いことが分かりますよ。「恋」の説明には、「手に入らない遠くにある存在を慕う気持ち」というようなことが書いてあるはずです。

もう一歩進んで、「恋」という語について、「異性に限らず、自然の草花や動物についても使われた語である」とか、「相手や対象物が自分の手に入る予定や確実性がある場合には、この語の使用例は見られない」といったことが書いてある古語辞典は、優秀です。旺文社の辞典だったでしょうか。あの辞典の「恋」の説明は非常に良かった気がします。

ともかく、男性側からのそういう「恋」を、今とりあえず、私の対女性共感覚としてみます。

そうなると、今日、こうして目の前に女性である皆さんがいらっしゃるわけですが、私の皆さんに対する感覚・感性・感情・感謝、一言で言うと、「あなた方という女を感じる」感覚は、現代日本語の「恋愛」ではないかもしれないけれども、古語の「恋（こひ）」ではある、ということはあり得るわけです。

ところが、この感覚でさえ、排卵などの生理現象が起こっている女性の体から空気中ににじみ出てきた化学物質か何かを、稀有な感覚の持ち主である私が敏感に察知していると言えば、説明が付くのです。

つまり、私の対女性共感覚は、科学の外にあるものではなくて、いずれ我々の科学が行き着く果ての究極の科学でしかないわけですね。そこが自分でも滑稽なのですが、ともかく、そういうことです。

今のところ、とりあえずは、動物としての男という生き物の特質とは、そういうものなのだと思ってみて下さい。

男性になくて女性にあるもの

しかし、猫が人の死期を分かり、飼い主の女性が猫の死期を分かったなどというのは、数時間後や数日後といった未来の話であって、まさしく「未来予知」と言ったほうがよいようなもので、私のように直近の過去の現象を持続的にとらえているのとは異なりますよね。

この点が、「男には女が分からない」点だと思います。私にとっては深い関心の対象なのです。

つまり、女性の皆さんには、私のような鋭敏な超絶五感を持つ男でさえ達し得ない、とても鋭く美しい感覚があるのではなかろうか、それが「女（おんな）」という生き物ではないか、そういうことです。

そういう問いかけは、単に甘美な嗜好を持つ男が恰好つけて問うただけのものだと言って済ませるわけにはいかないと思います。少なくとも、皆さんの自我意識にはのぼっていないかもしれないけれども、皆さんの体は今もそういう外界察知能力を持っているかもしれないわけです。

前の人の曲がり方を当てることを、すでに知った直前の過去の現象として説明するには、その人が「こっちに曲がるぞ」と思ったその意志、脳の神経細胞のはたらき、運動神経のはたらき、筋肉のはたらきなどを、数十メートル手前で数十秒前に力学的・電磁気学的・化学的なレベルで察知する、ということになりますね。

これについては、私もまだ詳しくは分からないのですが、ペットの猫が飼い主の病気や死期を当てるということは、男の私が「ある」と感じるのですから、女性の皆さんは、なおさら「ある」とお思いになるのではないでしょうか。

私は、女性の持つ感覚というものには、私のような鋭敏な感覚の男でも一生涯到達し得ないものがあると思います。もちろん、女性が一生涯到達し得ない男性の思想なり哲学なり論理というものもあるのですし、先ほどの私の著書自体が、懇意な知人女性から見ても、奇抜で、異色で、男の世界のものかもしれないのですが、ことに「虫の知らせ」というようなものは、ほとんど女性の専売特許ではなかろうかと思います。

「虫の知らせ」、聞いたことあるでしょう。私は、ことに共感覚や解離性障害や強迫性障害の女性とお会いするようになって以来、女性が時に訴える「ああ、何かが起こるかもしれない」という「虫の知らせ」の純粋な感性に目を向けるようになりました。

私は、特に強い共感覚や思いやりや優しさや強迫症状に生きる女性は、光や音といったものを本当に「触って」いるのではなかろうかと思います。単なる詩的表現やレトリックではなくて、もっと肉感的・物理的なものとして感じているのだろうと思う。

もちろん、私がそういう感覚の持ち主だから、そう言えるということもありますが、そういう女性の感性は、常に触覚、あるいは五感以前の直接的な世界への触覚性・直覚性と関わっていると思いま

す。

こう申しますと、「女は男の浮気を見破る直感を持っている」などという方向性に舵を切る最近の女性は多いかと思いますし、間違いではないと思いますが、ここはそういう俗的な話をする場ではありませんから、もっと学術的に深い話もしてみましょう。

「女性」とは「永遠に手の届かない未知の過去」の名前

さて、皆さんに先ほど書いていただいた回答用紙を、ご自身で眺めていただければと思います。日本語の「さき（先・前）」という語の意味を好きなだけ書いてみて下さい、という問題ですね。

語源は定かではないのですが、現在の「さき」にも大きく見て四つの意があると思います。

一つは「先っぽ」「岬（み・さき）」というときの「さき」、つまり先端の意ですね。それから、「行き先」「嫁ぎ先」と言うときの「さき」、つまり中心から見て空間的に隔たっている場所・前方のこと。それから、「先ほど」「さっき」「お先にどうぞ」「転ばぬ先の杖」と言うときの「さき」、つまり時間的に前・過去のこと。さらに「まだ先の話だ」「一寸先は闇」と言うときの「さき」、つまり時間的に後・未来のことです。

とても不思議でしょう。上代日本語には、最後の意味はなくて、現れるのは平安以降なのです。そして、数百年間、あまり根本的な変化がなくて、最後の使用法がいきなり増えるのは、文明開化後と戦後です。

それまでは、もうすぐ起こると思われる少し未来の物事や自然現象などについては、すでに過去のこととしてしか書いていない。というより、たぶん、それは未来ではなくて、本当に前兆現象などを体感で察知していたので、過去と言うよりは「既知の未来」そのものだったからでしょう。

だから、最後の意味での「まだ先の話だ」という使い方は、後の時代に生まれることになる。「まだ先の話だ」といった表現が急増するのは、戦後になってからです。

それまでは、今の日本語で言えば「もうすでにまだ先の話だ」という意味で、「先」と言っていることがあります。「先」よりもずっと遠く、まだ知らない未来を言う時は、和歌に特に多いですが、「行く末」とか「果て」という言い方が多かった。「末（すゑ）」と言うと本当に端っこ、「果て」と言うと本当に遠くだという感じがするのは、今の皆さんにもお分かりでしょう。

昔の女性には、遠い「行く末」や「果て」は別として、「ちょっと先」のことなら五感で察知できる力はあったのだな、という気がします。

それに私は、上代から江戸時代までの日本人の時空把握の仕方には、時間と空間とを分けるという発想がないのではないかと思うのです。もちろん、「time」や「space」としての「時間」と「空間」は、明治以降の日本人にしかないですが、そもそも絶対的な基準点というものを時間や空間の中に定めるという意識が、かつての日本

人にはさらさらなかったように感じます。

空間的に離れた場所にあるものを「見る」「聞く」「感じる」という感覚行為は、対象の過去を感覚しているわけだから、空間的に遠方であることと、時間的に過去であることとは、物理現象として同義である、ということが分かりますね。

だから、上古代の女性たちは、時空の「さき」のことを分かる感覚を持って生きていたのだと言ってよいと思います。そして、日本人の中から「さき」のことが分かる感性が徐々に失われるにつれて、「さき」の意味内容にも変化が現れ、「まだ知らないこと」「未知」という含意を持ってきたのだと思います。

時空を「変化」「無常」「循環」などとしてとらえていた日本人が、「過去・現在・未来」という直線的な時空観を欧米世界から導入した途端に「さき」を知る感性を失ったという、仕方ない面もあるでしょうけれどね。

どうして、そんな古語の定義の変遷に敏感に気づいたり、それが気になって仕方がないかと申しますと、それこそ、私の持つ、あなた方女性へと向かうこの共感覚、純粋感覚の原点を探究したいからです。

私が皆さんの排卵や月経をこうして見たり聞いたりさせてもらって、「赤紫色の香気だな」とか「青緑色の変ホ短調だな」と感じるのは、私のこの体の「さき」にある皆さんの体が見えているからだと思うわけです。つまり、私は、いわゆる今の自閉症児や動物たちのオスにも匹敵するような鋭敏な知覚によって未来を既知化しているのではないかと思うわけです。

皆さんは、私の数メートル先にいますから、今の言葉で言えば、ちょっと「過去」ですよね。しかし、本来、「さき」とは「まだ手が届かないながらも、すでに知っている未来」である。むしろ、そちらのほうが、日本人の男女関係や自然風物の情趣を表す「さき」という語の本意だったわけです。

皆さんは私にとって、永遠に既知の未来、永遠に未知の過去なのです。もっと一般化すると、本来、女とは男にとってそうだったと思います。「既知の未来性」、「未知の過去性」、「知っているかのように未来からやって来て、知らないうちに過去へと去ってゆく」。それが皆さん方女性の美しさなのだと、私は思っています。

ただし、男にとって「女とは我が既知の未来、未知の過去である」と言えるためには、「さき」が見えるだけの鋭敏な感覚・感性・共感覚といったものが男の側にもないといけないということを、古語を眺めていて思い知らされるのです。つまり、「女とは、手の届いた未来であるけれども、手の届かない過去のことである」ということのうちに、「恋」の有意義性が立ち現われてくる気がするわけです。

『松浦宮物語』、そして、「天城山心中」事件

鎌倉時代に『松浦宮物語』という物語が書かれました。藤原定家の作という説が有力ですが、日本の橘氏忠という男が中国の唐の女たちに恋する物語です。これは何も、「日本の男は昔から外国の女が

好きだった」などという話ではなくて、今述べてきたようなことを象徴するような物語です。

つまり、「手の届く未来と手の届かない過去の象徴」として、物語の舞台設定・人物設定を「遠すぎも近すぎもしない海外の地の高貴な女性」にするのがよいわけです。この物語は、我々男にとってあなた方女性がどういう存在かを示している気がします。

それに、物語だけでは終わらなくてですね。皆さんは、「天城山心中」事件というのをご存知ですか。映画の『ラストエンペラー』でも有名ですが、清朝最後の皇帝で満州国の皇帝でもあった愛新覚羅溥儀の姪に、愛新覚羅慧生という女性がいました。この女性が、大久保武道という日本の男子学生と心中したわけです。

合意の心中かどうか、あるいは、どちらかがどちらかを殺した無理心中ではないか、など、色々な議論、と言いますか、見解の食い違いや政治的なケンカが当時からありますけれども、こういう時は、ご本人たちの遺したものをとりあえずは信じるというのが、ご本人たちへの弔いになる上に、真実に近いと感じるわけでして、慧生さんは、「彼に強要されたからではありません」、「一般の人にはおそらく理解していただけないと思います」と最初から手紙に書いております。

清朝というのは、いわゆる征服王朝でして、漢民族の国ではありません。女真族や満州民族と呼ばれる民族の国です。元々は少数民族の一つでしたが、愛新覚羅氏は清朝の皇統を占める高貴な一族となったわけで、当時は、「天国に結ぶ恋」として有名になりました。

目の前に好きな女性がいるのに、その女性は永遠に自分の伴侶にならない。自分の身分のせいで、好きな男性と結ばれない。ならば、一緒に死んで恋を成就させよう。そういう、物語のような現実が起きたわけです。

文芸評論家の秋山駿さんが、『恋愛の発見』の中で、恋愛は犯罪に似ているとおっしゃっていますが、まことにその通りでして、恋愛心理は犯罪心理に近いものがあると思います。ただし、許された犯罪ですけれどね。

この天城山心中のように、天皇・皇帝・皇族に近い血統の若い人々の情死・心中などは、当然隠されるべきものとされてきたようで、実際に隠されてきたものが多々あります。しかし、心中しようがしまいが、我々の男女関係そのものが、極めて美しく狂おしく犯罪的であるわけです。

むしろ、高貴な人もそうでない人も同じように、死ぬほど人を好きになることがある。それを全面的に認めることを避けるようでは、人間の本質は見えないと私は思っています。

今の時代、というより今の日本では、女性は我々男の未知の未来になったような気がしています。完全な未来、完全な未知に成り果てたものを現在に奪還するために必要なものは何だと思いますか。それが近現代的知性とか近現代的自我といったものだと思います。「時間」や「空間」は、現代人にとっては視覚と関係している、と言うと、分かりますか。五感のうち、触覚はもちろん接触ですし、味覚もほとんどの場合は接触で、嗅覚・聴覚の順に遠隔領域の「出

来事」を感覚することが可能になりますよね。視覚に至っては、障害物がない限り、どこまでも遠くの星、どこまでも過去の星を目にすることができる。

「触覚・味覚・嗅覚・聴覚・視覚」の順に五感を並べて書くと、我々の感覚の悠久の移り変わりと、我々の時空観というものを、ごく自然に結び付けて感じていただけるかと思います。

化学物質や音波は、減退・拡散・消滅を伴いますが、光はただそこにあれば必ず我々の感覚に訴えますし、とどまるところを知りませんから、現代人にとって「感覚」とはほとんど「視覚」でもあるわけです。

我々現代人は、視覚が物事の本質・真理に迫る最重要の感覚だと思って疑わないのではないでしょうか。「感覚」が「触覚」と同義である微生物などには、時間も空間もないのでしょうね。微生物のように物にぶつかってから進行方向を変えるくらいなら、現代人は最初から「見て」避けますね。

しかし、それは裏を返せば、最も触覚的な感覚、最も視覚的でない感覚が、永遠不変の真実からは遠い感覚とされて、視覚の下位に置かれ、野蛮な下等動物の感覚とされてしまって、信用されなくなったということでもあるわけです。

そういう考え方は、「神→人間→自然」と序列を付ける西洋キリスト教世界からは比較的簡単に出現したことは確かです。元々はキリスト教のせいではなくて、一部の教会勢力・為政者の権威付けのためのキリスト教の不当利用のせいでしょうけれども。

基本的に、「知覚のランキング付け」は、西洋世界ではごく普通に行われてきたことでした。プラトンもアリストテレスもデカルトも、五感のうちで視覚と聴覚を高位において、他の三つを重要視していません。

デカルトに至っては、「動物はただの機械だ」と言っていますし、特に触覚だけで動く動物を侮蔑しています。デカルトの知性がなければ、我々の文明はここまで来ませんでしたが、一方で負の遺産もあったとは言えそうです。

「さき」の他にも、「あと」「まえ」「うしろ」などの語についても、考えてみると面白いのです。「あとずさり」は空間的な後方、「あとまで残る」は時間的な前方。「まえに言ったこと」は時間的な後方、「まえを向いて歩く」は時間的・空間的な前方。「うしろを振り返る」は時間的な後方、「日程がうしろにずれる」は時間的な前方。

こう考えると、悩ましいけれど、楽しいでしょう。だから、日本語を英語訳するということは、常に妥協であって、「うしろめたい」ことでもあるわけです。「うしろめたい」は「後ろ目甚し（いたし）」ということです。今挙げてきた言葉は、実に共感覚的・時空混淆的な言葉だと思います。独立した視覚でとらえるような言葉ではないと思います。

ともかく、近代以降の人類の自我というのは、遠くのものは「見て」「分析して」知るものだという前提で成立しているわけです。

ところが、日本の女性である皆さんの一部がお持ちの共感覚や強迫症状、「虫の知らせ」、縄文時代から江戸時代までの日本人の感性

には、そういう世界観・自然観は、どうも当てはまらない気がします。

本当は、明治時代に西洋と直接ぶつかり合った日本の知識人も、自分の中にある日本的感性を西洋的知性とどう折り合わせるか、葛藤しています。全くそんなことを総国民レベルで考えていないのは、日本史上、我々くらいです。

それでも何とか、「目で見」ずとも、肌に感覚される「日本的なる何か」があるということを分かっている皆さんのような人たちも生き残ってはいる。そういうことを、女性である皆さんの体において感じ続けてもらえるとしたら、嬉しいのです。そういうところから、さらに「日本の女性らしさ」というものに迫ってみましょう。

阿頼耶識、「虫の知らせ」

それで、ちょっと仏教の話になるのですが、先ほど「大いなる神秘」や「アニミズム」ということを言いましたね。つまり、西洋キリスト教用語としての唯一神である「神」とは言いたくないけれども、何となく自分たちの民族性・文化性の「一般化」を行いたい気分、つまり、我々で言うと、日本人らしさ、日本人臭さ、無数にいる神々のニュアンスも出したい、という時に使う色々な用語なのでした。

そんな際にもう一つ、日本人には「仏教用語・仏教概念を使う」という手があるわけです。そもそも、「神道」という概念がありますよね。あれは一種の「宗教学的分析」の結果なのです。

まずは、「自然の神々」だけが頭にあるのが日本人です。そこに仏教という宗教体系を輸入したわけですね。その仏教体系、つまりは、如来だの菩薩だの、そういった説明をそれまでの自然の神々信仰に適用して、「道」としたのが「神道」です。近世以前にも、色々な神道の分派が生まれていますし、「神道」という言葉もありますけれどね、「宗教学」としての「神道」とは、ちょっと違うのです。

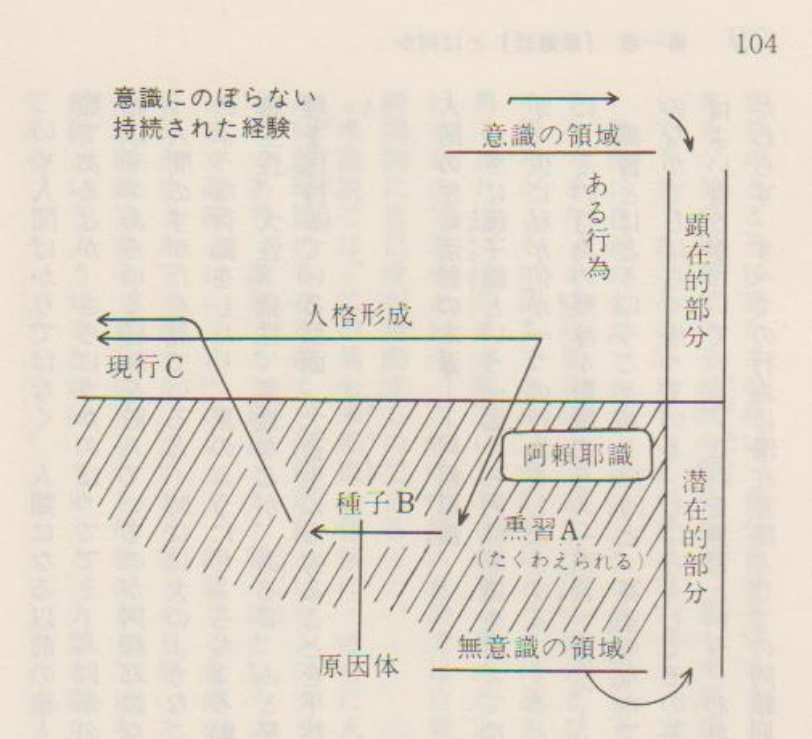
ですから、武士道とか商人道とか言いますけれども、あれは近代用語です。我々が自我でとらえられなかったものを自我でとらえ返す、そういう作業の繰り返しが、日本史学の正体であり、本来の日本人の器用さでもあります。

さて、唯識思想の言う阿頼耶識は、私は極めて共感覚的な宇宙観の結論であると思います。女性の皆さんの体にベクトルが向かっている私の共感覚や、数少ない日本の女性が今も体に残す共感覚や「虫の知らせ」や予知の力に、この唯識思想も「温かい根拠」を与える可能性を考えて、目を向けたいと考えるこの頃なのです。

一応書いておけば、私は禅や中観思想などが好きな人間なのでして、特に道元の『正法眼蔵』に心惹かれてきたのですが、ここではそれらと対立する思想ではなくて、むしろ通じ合う、大乗仏教の根本思想の一つとしての唯識思想を考えたいと思います。

阿頼耶識というのは、人間存在の根本にあって、宇宙万有の発生の根本にある心の主体、などと設定されているものです。何のことやらとお思いでしょう。原初の大乗仏教を支える根本思想の一つと

思って下さい。



《『華厳の思想』（鎌田茂雄、講談社学術文庫版）》

中観や唯識を勉強すると、いかに今の日本の宗派仏教が「仏教」とは異なる宗教であるかが身に沁みて分かります。唯識思想では、八識、つまり、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識・末那識・阿頼耶識というのを設けるのですが、その一番根本の「識」が阿頼耶識なのです。

『華厳の思想』（鎌田茂雄）から引用したものを読みますね。

自分が生まれてこのかた、泣いたり笑ったり怒ったりしたすべての経験を貯蔵しているのが阿頼耶識である。自分が生まれた以後ばかりではない。自分の両親の経験、そのまた両親の経験というようにさかのぼってゆくと、人類が発生して以来のすべての経験を蔵しているのである。いや人間ばかりではなく、人類になる以前の猿人類であるとか、さらにさかのぼって爬虫類であるとか、さらにさかのぼってアミーバ以来のすべての経験を蔵しているのである。無始以来のあらゆる経験を貯えているのが阿頼耶識なのである。

今は、ちょっと乱暴なのですが、仮にこのようなことをわざわざ改めて「論じる」のが男性であるとしてみます。よく、「男は知性、女は感性」と言いますね。まあ、そう簡単には行かないのですが、「仏教」や「神道」といった知的宗教体系を論理で記述する「性」を男だと思って下さい。

ああ・・・。こういうことを申し上げると、今の時代、本当は一発アウトを食らうと思います。今私が述べようとしているのは、「論理・知性・学問といった語は、男の思考法の名前である」というこ

とです。そして、「神道のうちに日本の男と女があるが、仏教の神道に対する関係は男の女に対する関係に相似である」ということです。

今日は大学やテレビに呼ばれたわけではないし、タブーはないから、言わせて下さい。それにしても、最近の「男女平等」の風潮が、いちいち気になってしまいますが。

ともかく、皆さん方女性というのは、自我において阿頼耶識を思考することはほとんどない「性」なのだけれど、その身体は男性の身体よりもすでに阿頼耶識に近いと、私は思うわけなのです。

そういう意味では、「哲学」とか「宗教学」といった学問の「体系」というのは、男の思考方法、しかも特に、西洋人男性の世界観の総体なのです。

私は、ことに日本の女性の「虫の知らせ」や「勘」や「直覚」や「さきを知る力」は、フッサールの言う本質直観やレヴィナスの倫理学にさえ該当しないように感じるわけです。

本来なら、阿頼耶識も、それ自体は哲学的・思想的なものは含んでいなくて、「人の本性」を言っているだけなのでして、「人のあるべき倫理的な姿」を言っているのではないのです。

ここが今の我々日本人にとっては難しいところなのですけれどね。ただし、そこまで触れる余裕はないから、今は阿頼耶識をもって「無意識の深層」、「人間の動物性」、さらには「東洋人の本髄」というような意味に思っておいてくれたら大丈夫です。

『万葉集』の恋の歌にあるような、日本人の情動や感動や阿頼耶識と深く結び付いた「虫の知らせ」や「勘」や「直覚」や「共感覚」と、それまで欧米を覆っていた永遠不変の一神教的普遍性を退けて生まれた「本質の個体性」とは、異なるものであるということです。

前者こそが、皆さん方日本の女性に固有のものであると、私は思うわけです。実は、西洋の男性でもそのような境地に達した人がいないわけではなく、私が敬服してやまないニーチェはその一人だと思っています。

私は今、日本の女性の皆さんの鋭い感覚性を、「虫の知らせ」や「勘」や「直覚」や「先を知る感覚」、といった語で説明してきましたが、「共感覚」という語で説明する場合も、同じことになるわけです。「共感覚」という語を、今私が述べてきたような意味で用いている日本の男性たちは、過去にもいるのです。特に、和歌研究者ですね。

ここまで来ますと、用語なんてもうあまり重要ではないのですが、しかし、「説明する」というのは、結局は言語化ですからね。「共感覚」という用語で説明する場合は、日本の上代から江戸時代末期までの時空観・宇宙観は視覚だけを特別視するものではなかった、という点を強調している、ということです。

女性の「勘」の鋭さ

皆さん方女性の共感覚、いや、女性の感覚の全ては、男性である私には唯一体験できないものです。「岩崎さんみたいな鋭い感覚の男性なら、私たちの体や心が全部見えているのではないか」と思ったら、全くの間違いでしてね。自分の共感覚を探究すればするほど、

女性に対する自分の無知蒙昧な姿を知ることになります。

女性を実体験できないそのもどかしさに、さらに面白味を感じるのです。こういった女性の直感・感覚について探究したのは、何も私だけではなくて、我が国で見事な哲学的考察を試みたものに、例えば黒田亮という人の『勘の研究』というのがあります。完全に東洋思想書ですけれどね。

その中で、著者は「女性の直覚は男性の推理に匹敵する」とか、「女性の心理はなかんずく防御を主とするに対して、男性のそれは頭脳を第一とする」といった欧米の研究者の論文の言葉を借りつつ、ただの感覚とも違い、理性や知性とも違う、「直覚」なるものを説明しているわけです。

著者は、「勘」を、世阿弥の芸術から禅に至るまで、あらゆる日本と東洋の芸術と哲学とに敷衍して述べているわけです。そして、「子供がなにもかも忘れて無心に遊びに耽ってる刹那には、子供自身の自証に現われるものは大部分覚（かく）である」とも述べています。

要するに、男の側から分析してみた、女性と子どもの不思議な感覚世界の説明です。私も、これまで様々な共感覚者の女性や解離性障害の女性と面識を持ってきました。

そのたびに、『「勘」の研究』が述べるところの「覚」や、西田幾多郎の『善の研究』が述べるところの「純粋経験」というものが、今や私を含めたほとんどの男性が論理と推理によって達するだけのものである一方で、いまだに少数の日本の女性においては、すでにほとんど生まれつきの「体感」であるのだろうと、そう感じているわけです。

私は、そもそも全ての女性は、科学文明社会の功罪のうちの罪の部分、例えば、学校教育や就職活動で出遅れた人間を分類して精神病理名を付けるなどの悪しき風習の甚大な後天的影響を受けずに、生まれてからただ子どものままの感覚でい続けたならば、皆共感覚者や解離性障害者ではなかろうかと思っているのです。

もちろん、褒め言葉として言っています。こんなことは、正規の仕事として大学や講演や出版社やテレビ局から呼ばれた場合には、難しい発言かもしれません。しかし、今日は空気が違いますし、賢い皆さんに呼んでいただいたので、言えてしまいますが。

男性も男性で、ほとんどの男性が狩猟も農耕もする必要がなくなったこの近現代文明社会の中で、急激に「直感的なるもの」、「直覚的なるもの」、「共感覚的なるもの」、「日本的なるもの」、「和歌的なるもの」を失ってきたと思います。私はそのことが、男としてあまりに残念でならないのです。

先ほどの例にも挙げましたが、昔から猫は人間の死期を悟ると言いますね。数時間から数日、数週間も前のこともあるらしいので、その頃から人体というのは、化学的なレベルで死の最終準備を開始するのだと思います。

猫のみならず、動物は常に人間とともにあったわけです。日本人にとっては、自分たちと動物と自然とは、別ものではなかったのです。

今の我々は、海外の先住民族の森の奥での生活をわざわざテレビ

で見て、「未開社会・野蛮社会なのに頑張っているんだな」などとわざとらしく感心しますけれども、そういうムラ社会においては、人間は自然と対峙する存在ではなく、人間自らもまた自然の一部でした。

皆さん方女性の持つ直覚なり第六感というものは、日本や東洋のかつてのアニミズム的・シャーマニズム的な感覚世界に原点を辿ることができるのです。

そうやって自然からもらった体ですから、一気にコラーゲンを食べて肌を綺麗にしようとするなどは、やはり「色っぽくない女性」がすることだと、私は思います。そもそも、化学的に見て間違ったことなのですが。

ともかく、私は、「色っぽい女性」というのは、「自分が動物であることを忘れない女性」のことだと私は思います。本当にそこが分かっている女性は、現代の怪しい宗教やスピリチュアルな世界にかえって引っかからないと思います。

私には、現代に生きるごく少数の女性、今日ここにいらっしゃるような皆さんが残している純粋な気持ちを見るにつけて、あの縄文時代から江戸時代、それから本当は戦前に至るまでの日本の女性が広く持ってきた一種の「巫女性」というものが脳裏をかすめるのです。

「巫女性」。今から、いよいよ「巫女性」のお話をします。

今回、あんな震災が起きましたけれども、思えば、自らの体の感覚を使って地震察知ができない、あるいは最も予知の遅い、つまり、地震が来てからやっと気づく動物は、厳密に調査すると人間だけではなかろうかと思うことがあります。

子どもの頃は私も、もっとひどく悩んだものです。私は、ともかく自然観察力が非常に鋭い子でした。周りのほとんどの男の子がファミコンやゲームボーイというおもちゃをやるのについていけず、家に泣いて帰っていました。

根本的に人間の作りが違ったのではないかと思うくらい、苦しんでいました。鬼ごっこのような「かけっこごと」は好きだったのですけれどね。誰が誰よりも楽しいゲーム機を持っているなどということで争う社会構造が、全く自分の心には響かなかったです。

「学校を出て社会に出る」などという言い方がよくありますが、今は学校もその意味での「社会」です。今の子どもは、すでに社会に慣れたかのような行動を取りますし、子どもによる詐欺事件もあるくらいです。

今こうしてしゃべっていても、胸が熱くなりますけれどね。私は、星の一生の勉強、恐竜の勉強、地層の勉強、そういうことばかりやっていました。そちらのほうが生き甲斐だったからです。小学校の自由研究は、「赤色超巨星の一生について」でした。

今は私も、地震察知は極めて稀にしかできませんけれどもね。鳥の飛ぶ高さや雲の形状の変化などを見て地震察知をする研究もあるようですね。

ただしやはり、男性よりは女性のほうが、科学の力を使わない段階で、未だ起こっていないことに対する予知能力というのはあると

思うのでして、私はそのような女性の直覚をすばらしいと思うわけです。私は、自分が他の男性にはない感覚を持つ男性であるからこそ、そのような自分でさえ手の届かない女性の感覚世界を探究していきたいと思うのかもしれませんが。

日本の女性が感じる「寂しさ」について

ちょっと話がそれましたが、巫女の話ですね。その前にですね、「寂しさ」ということについて、少しお話します。

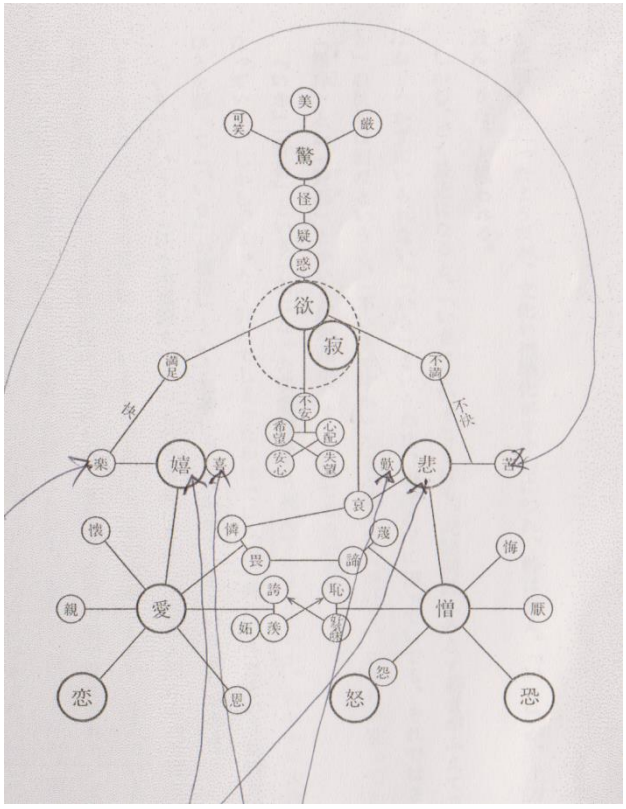
皆さんの中には、すでに恋人さんがいらっしゃる方もいるようですね。その人を好きな気持ちを思い起こしてみて下さい。恋人さんがいらっしゃらない方は、それでも全然かまいません、これからどんな男性を好きになるだろうと考えたり、過去に初めて男性を好きになった時の気持ちを思い出してみて下さい。

どんな感じですか。楽しいものですか。苦しいものですか。実際には、その間ではないでしょうか。あるいは、ちょうど中間よりは、「苦しさ」に寄った感情ではないでしょうか。

「人を思う気持ちなど千差万別で、追究する意味がない」という立場も、それはそれで有りかもしれません。けれども、今日のように「日本の女性についてお話を聞かせて下さい」という中で、「日本の女性の恋愛感情」をも一般化すると、「寂しさ」や「哀しさ」や「苦しさ」というものは、きっと外せないと思っています。

そういう「寂しさ」というのは、恋愛が成就するかしないか以前に、先験的に日本人の感情としてあると思います。別に、外国人には恋愛の寂しさがないと言っているのではありませんよ。リオのカーニバルでお尻を振って踊り捲るブラジル人女性にも、恋愛の悩みというのはあるのでしょう。ラップ音楽に乗りながら「Love & Peace」と叫んでいる黒人男性にも、切なさはあるのだと思います。

ただし、言語が自我形成の基本にある人類においては、感情の中身に偏向性があるのです。日本人の場合は、「寂しさ」は「恋」の感情の真骨頂と言ってよいと私は思います。



《『情緒の系図』（九鬼周造）》

先ほど、九鬼周造という哲学者の『情緒の系図』という図をお配りしましたね。少し私の落書きが入っていて申し訳ないです。実際には我々の感情というのは、こんなに綺麗な形には描けませんが、便利な図ではあるので、これを眺めながら聞いてみて下さい。

「寂しさ」「かなしさ」「苦しさ」「どうしようもなさ」「切なさ」「儚さ」「悩ましさ」「申し訳なさ」「致し方なさ」「やるせなさ」、色々な言い方がありますけれど、そういった気持ちは、先ほど言いました「虫の知らせ」や「勘」、「直観」といったものを持つ身体から出る気持ちなのです。

その「寂しさ」を代表するものは、古来、日本人にとっては男女の情であるのだと思います。先ほどの「さき」の話で言いますと、日本人の時空観、時間と空間とを同じ尺度でとらえる感性は、常に男女の距離感に関わると言ってよいわけです。

日本人の時空のとらえ方から出る「寂しさ」や「切なさ」や「儚さ」には、固有の情感があるということは言えるわけです。こんな歌があります。

「さきの世の契り知らるる身の憂さに行く末かねて頼みがたさよ」

『源氏物語』の「夕顔」に出てくる歌です。「さき」や「する」が入っていますね。このような歌を日本の女性に書かせる「寂しさ」や「かなしさ」や「苦しさ」は、一体としてとらえられている時空の広がりから出るものです。

ただ茫漠と広がる森羅万象に対して感じる自らの有限性・無力性、あるいは、被投性といったものが表れています。被投性というのはハイデガーが言ったものですが、そういう不条理を「直観」しつつ異性を感じたときに湧き出るものが、日本的な「寂しさ」ではないかと思います。

難しい日本語で言いますとね、「縹渺美（ひょうびょうび）」という言葉があります。これは、春の霞の空に朧月がかかっているような、そういうぼんやりした時空の広がりを言うのですが、日本の女性の恋心にも、この日本語は使えるわけです。

それこそが、一見すると同じく「直観」「直覚」などと訳される西洋の「intuition」という語が内包し得ない日本の女性の「勘」や「直覚」や「虫の知らせ」であり、「もののあはれ」「切なさ」「かなしさ」であると思います。

九鬼周造は今の『情緒の系図』の本文の中で、次のようなことを言っています。読みますね。

万物は、有限な他者であって、かつまた有限な自己である。それがいわゆる「もののあはれ」である。「もののあはれ」とは、万物の有限性からおのずから湧いてくる自己内奥の哀調にほかならない。客観的感情の「憐み」と、主観的感情の「哀れ」とは、互に相制約している。「あはれ」の「あ」も「はれ」も共に感動詞であるが、自己が他者の有限性に向かって、また他者を通して自己

自身の有限性に向かって、「あ」と呼びかけ、「はれ」と呼びかけるのである。

皆さんが男性を好きになって胸が苦しいと思うその気持ちは、有限なあなた方だからこそ持つことができる哀調なのです。

私は、和歌も詠みつつ、漢詩をはじめとする漢民族文化にも敬意を払っていますが、こういう哀調の気持ちは、無限だと勘違いするほどの広大な土地のど真ん中を制覇すること、つまり中原を取ることが勝利であると思う中華思想や、自然征服・先住少数民族の殺戮を文明拡張の基盤とする西洋社会からは、なかなか出てこないのです。

それが良いか悪いかという判断については、国や民族によって全く違ってしまいます。あちらにはあちらの論理があって、それはそれで私は深い関心があります。律令制の枠組みや漢字や科学技術や軍事技術を外から学んだことが、いかに日本の国家形成に役立ったかは心に留めておくべきでしょうね。

むしろ、今の日本の学生や社会人のドンチャン騒ぎを見ていますとね、私は中国や韓国やアメリカの悪口を言っている場合ではない気がします。

簡単に申しますと、日本文化の情趣や恋愛の哀調を肌で知っているような日本人がちっとも追いついていけない社会が今の日本だという気がするのです。奥ゆかしい少数の女性がドンチャン騒ぐ多数の女性に全く追いついていけない。むろん、追いつく必要などないと思います。

どんな女性の集団にも、そういう魅力的な女性が少しずついるのを見かけます。そういう女性は、海外の女性ではなく、日本の多くの女性の大衆心理の被害者だという気がします。男として実に申し訳ない気がする。かわいそうで涙が出ます。

男社会もたいだい同じ構図ですけれどね。しかし、女性のはしたなさもひどいものだと思います。「はしたない」という言葉は死語でしょうか。しかし、こういうことは、言う気のある男性から順番に言っておかないといけないと、私は思っています。

いわゆる「女子会」の飲み方やカラオケの盛り上がり方を見ていますとね、震災で亡くなった人たちに申し訳ないと思います。若い女性ばかりではありません。どうして戦争のつらさやお金の大切さを知っているはずの多くの高齢者のおばあさんたちが、スーパーのレジで店員さんに不当な文句を言ったり、電車内で大声でしゃべったりなど、あんなにマナーが悪いのかが分かりません。

もちろん、男が感じる「寂しさ」や「あはれ」と皆さんのような女性が感じる「寂しさ」や「あはれ」とは違うと思うので、また分けて考察しなければならないですけれども。

今から「先」のこと、つまり、自分がいつかは死ぬ存在だということがもう分かっている、自分の身にやって来るさだめがどんなものか知っている、そういうときに湧き出る「切なさ」や「かなしさ」や「あはれ」、あるいはそれらの入り混じった情感、そして「奥ゆかしい佇まいと立ち居振る舞い」が生き方の基盤にある女性は、何歳

であっても、少なくとも私から見ていて、美しいのです。

上古代の日本の女性の生活

さて、日本語のお話をしてきましたが、今度は少し、あなた方女性の身体ということについて、お話してみます。

女性が、妊娠・出産・子育ての大役を担っていることは、太古の昔から現在に至るまで変わらないことですよね。今の時代、そこに至る女性と至らない女性との差が経済力の差で決まるようなところがあって、心が痛いのですが、ともかく体の構造・機能としては、女性の役割と言うのは経年変化していないわけです。

現代の我が国の女性こそ、前後の平坦な時期に挟まれて、一回につき約一か月周期で、一生のうちに五百回ほどの性周期の波を経験するわけです。かつての女性の月経回数は今の十分の一でした。動物として見れば、その程度が体の限界なのです。しかも、閉経よりも先に寿命を迎えるという過酷な人生でした。と言うより、閉経を知りません。

縄文時代には、平均的に見て子どもの二人に一人はすぐに死にました。それに妊娠中または出産直後に命を落とす女性が少なくなかった。そのような中で、個体数を保つためには、常に妊娠・出産回数を繰り返していなければならないわけです。だから、縄文時代の人口変動は、ほとんど他の動物の個体数変動と同様でした。

縄文時代の女性の妊娠痕を調査した人はけっこういます。普通は教わらないことです。どうしても、性の話題ですからね。

例えば、『縄文時代の出産率と寿命』ということを歯学者の五十嵐由里子さんが調べておられまして、子どもの死亡率も、出産率も、最も高いのは北海道集団で、南下するにつれて両者とも低くなる、つまり、北・東は「多産多死社会」、南・西は「少産少死社会」であったと言うわけです。

ここで用いた人骨は、縄文後期から晩期のものですが、実はその時期は、関東・中部地方の人口が激減して、一時は二十五万あった縄文人の人口が七万五千になった時期です。その時期の植生を見てみると、食糧を得にくい照葉樹林が関東・中部に押し寄せたことや、同じ照葉樹林の西日本には稲作の発達があって食糧管理が早くから可能であったことなどが分かるわけです。

このような地域差はあったでしょうが、狩猟・採集を中心としていた頃の女性は、ただ妊娠・出産を繰り返す状態にあったと思われます。平均的に見れば、縄文時代の女性は初潮年齢を迎えたときから子どもを産み続けるようなことがなければ、人口の維持が困難だという計算になります。

上古代の女性と現代の女性の、卵巣と子宮の置かれた状態は、全く異なると言ってよいわけですね。

先ほど、「自我は時代が作る」ということを言いましたね。近代的な意味での自我は、当時はなかったでしょうが、しかし、その頃の日本の女性たちが「自分」というものをどうとらえていたか、考えてみて下さい。

良いとか悪いとか、倫理的にどうだとか言うことよりも、あなた方と同じ体を持った女性たちが、あなた方子孫を産み落とすまでに、ひたすらそういう時代を過ごしたという事実を、頭に描いてみて下さい。信じがたい気持ちになるでしょう。私も、そういう過去の女性たちに対して、深い敬意を覚えます。

ところが、男性の身体にはそのような事情がないわけです。しかも、生殖可能期間が非常に長いことはご存知ですか。きっと、皆さんの年齢くらいになると、もうご存知だと思います。

その男女差だけは昔から一緒でして、年長の男性が若い女性と重婚し、家族の人口を保ったことがあったようです。というより、重婚のほうが普通なのでした。

一方で、子を産む前に命を落とした妊婦の埋葬においては、妊婦と胎児の無念を晴らして、魂をあの世に送り出すための土偶がたくさん作られました。しかも、その弔い方が尋常ではないのです。尋常ではないというのが、近代化してから最近の高齢者あたりまでの日本の葬式のように豪華盛大だったという意味ではありません。気持ちのこもり方が尋常ではない。

今は、縄文時代の人々の生活を「文化」と呼ぶべきか「文明」と呼ぶべきかなどと議論が起こっているけれども、そんなことは重要ではないです。私はちょっと違う発想を持ってこの日本人の原点の時代を見てみたいと思っていましてね。

当時の女性に見られる、直覚性・呪術性・処女性の神聖視も、立て続けに行われた性行為・妊娠・出産も、対立するものではないと思います。自然信仰、アニミズム的世界観の中で、連続的にとらえられたものだと思うわけです。

本当は「処女」の意味も、今とは違うのですけれどね、とりあえずは、「純潔」、あるいは「簡単に体を明け渡さない」というとらえ方でも、間違いではありません。

ともかく、縄文人女性たちは、今述べたような状況に生きていたわけです。そして、そういった縄文時代にはすでに、日本女性の巫女的・シャーマン的な性質、あるいは若い女性・処女の女性の呪力への畏敬というものはあったわけです。

やがて初潮を迎えて、すぐに性行為・妊娠・出産を繰り返す宿命にある若い女性の処女性と呪力は、ムラ社会においては自然と付き合っていくために重要なものであったのではないでしょうか。巫女は自然の神々と人間とをつなぐ存在である。それは、のちの『万葉集』に描かれる女性につながるものでしょうね。

日本の女性の「巫女性」

少し難しい話をしますけれど、ある一つの時代においてはそれ以外に人間の存在・女性の存在の仕方は考えられないというような必然性や価値のある人間や女性の状態というものが、後世のある時代においては、精神異常や精神病理や社会の異端であると見なされるような場合は、しばしばあることです。

我が国においては、「巫女」という存在と概念が、そういうものになってしまいました。上古代の我が国で、巫女は「神がかり」して、尋常ではない状態になって泣きわめいて、体を動かしては神々と交信したわけです。

これは今の我々が思う体系としての「宗教（Religion）」とはかなり違うのです。女性本人たちはそれを宗教とは思っていません。むしろ、『記紀』や『万葉集』や神楽歌に出てくる日本の女性の風習、あるいは明治時代に入ってもなお沖縄や瀬戸内海やその周辺の島々には変わらない姿で残っていた巫女の風習は、精神病理学の分野では注目されています。強迫性障害や解離性障害や統合失調症などの分野ですね。

私が今「巫女」という言葉で言おうとしているものは、今の日本語だと「巫女的なるものを持っている女性」、「巫女性を持っている女性」という言い方が近いです。

現在は、「巫女」というと、女性の多くの職業のうちの一つだとい

うことになっています。だから、それと区別して、「巫女的なるもの」としての「巫女性」、「巫女的なる女性」としての「巫女」について、語っていきますね。

巫女という存在、女性という生き物は、我が国において極めて神がかり的なものでした。『記紀』は歴史書として見るなら、中央政権造成のための作為性の濃い文献ではあるのですが、女性の行動について書いてあることには、案外、今の皆さんが陥りやすい強迫性障害や解離性障害や統合失調症に近い記録が結構あります。

そういう意味では、『古事記』も本居宣長の『古事記伝』も、おかしなところはありますが、ある意味では「真作」なのです。簡単に言うと、日本の女性というもの、日本人というものを教えてくれる。

最古の歌集ということで言いますと、『万葉集』に描かれる人間、あるいは自然観・恋愛観といったものは、無文字時代の日本人の感覚や思惟のあり方を、如実に今の我々に伝えてくれます。

漢字を輸入したからと言って、ゼロから書物が書けるわけではない。漢字よりも前に和歌とかアニミズムとか、そういうものがそうは言わないまでもあったから、書けたわけです。女性の生活についても同様ですね。

巫女は、神々と人間との仲を取り持つ存在、託宣者であるのだと思って下さい。「神がかり」したときの女性の生体の状態は、極度の狂気とも極度の快楽とも言えると思います。

もちろん、ここで言う神々とは、一神教的で超越的な神ではありません。人間・自然と共にある八百万の神々のことです。自然界全体に霊性を感じとる日本人のアニミズム的・汎神論的な意味での神々のことです。

難しいですが、感覚的に今日の皆さんは分かっていらっしゃるような気がするから、それでいいです。日本では、どこにでも神がいるのです。山、海、川、岩、峠、家、村、国の神々。トイレにも神様がいます。

ここでトイレと言うと、かなり滑稽ですけれどね。「御手洗い」、「はばかり」、「雪隠」、「かわや」、「東司」、「御東」、「便所」、そう言ったほうがふさわしい文脈ですが、ともかく、我々が用を足すところにも神がいます。

だから、同じように、どこにもかしこにも巫女がいるのです。てっぺんから言うと、朝廷にも巫女がいれば、出雲にも巫女がおり、それぞれのムラ社会に巫女がおり、家々に巫女がいる、すなわち女性という生体がすでに巫女的で動物的であったような時代の話のことを、私は話してみているわけですね。

それを精神異常社会と言うのは、我々現代日本人かつ欧米的精神病理学の視点であると、とりあえずは把握しておいて下さい。これらの「日本の女性の性質」が、日本が初めて文字を持った時期から描かれていることの根底には、やはり「女性の呪力」、「女性の感覚の直覚性」というものがあると思うのです。

それは、女性の持つ動物的な共感覚や直観といったものが、人間の生死、自然の神々の機嫌の良し悪し、豊作か否か、そのようなことに直接に関わる感性としてあった時代だと言ってよいわけです。

折口信夫という人の全集に収められている『最古日本の女性生活の根抵』にもあるのですが、「事実に於て、我々が遡れる限りの古代に実在した女性の生活は、一生涯或はある期間は、必巫女として費されて来たものと見てよい」、「女として神事に与らなかった者はなく、神事に関係せなかった女の身の上が、物語の上に伝誦せられる訣（わけ）がなかった」ということです。

どういうことかと言いますとね、「女とは巫女である」、「巫女とは女である」、つまり、「女とは巫女の必要十分条件」だという意識、それが元々の日本人のほとんど本能的な意識です。

日本の女性が、初めて「文字で書かれた歴史」に登場したとき、すでに巫女的で全感覚的・共感覚的であったという点は、私にとっては最大の関心の一つです。言い換えると、日本語が文字を持たなかった時代の女性の感覚や思惟のあり方を、最も古い「文字の日本語」である『記紀』、『万葉集』は物語っているわけです。

それを西洋的な「真作」か「偽作」かという二元論で分析するわけにはいかないです。『記紀』や『万葉集』を読んでいると、私が自分の共感覚や自国の女性の感性を探究するのに、極めて役立つのです。

かつてのムラ社会における「あらゆる」若い女性のアニミズム的・巫女的な感覚と、現代の「限られた」若い女性しか強くは持たない共感覚や解離症状とにある連続性を、私は感じています。

日本の女性の呪力

裏を返せば、日本の女性の動物的な「メス性」としての純粋な直覚体験から、現代のほとんどの一般の女性に至るまでの感覚の矮小化の変遷を探究してみる必要があるとも思うのです。神話や『万葉集』を読んでいて、そういうことを考えざるを得ないだろうと、今はひしひしと感じるわけです。

日本の神話を見ていますと、私は、トロイヤ戦争の発端となったヘラとアテナとアフロディテを巡る争いのような女性観を感じないのです。日本の神話というのは、一見すると、漢民族神話よりも西洋神話に通じると思われがちですけれども、やはり日本は極東・東洋の一角であるという事実はどうしても外せないのでして、西洋の人間観からすると異質なのです。

西洋の女性には、神話の頃から「美」とともに「力」があります。この「力」と言うのは、「自我の力」のことです。もちろん、日本の女性よりも体が大きいですから、「体力・腕力」という意味での「力」でもありますが。

しかし、火の神または水の神とされるコノハナサクヤヒメ、これは桜の花が咲くように美しい女性の意味ですが、ここでは、「美」や「儚さ」こそ強調されるけれども、そこには「他我に対峙する自我の力」や「実際の戦闘力・腕力」というものはないわけです。

我が国の神話には、前自我による呪力は描かれるのですが、自我で起こす腕力・暴力は描かれない。女神によっては一見すると、聖母的な側面と戦の女神としての側面があるように感じられても、「自

我の力」を持つことではなく、その巫女的な面が主であって、やはり神がかりして神意を得るという体質に描かれているのです。

『記紀』や『万葉集』は、それまでの無文字社会を生きた日本人の人間観・女性観というものを如実に表しているわけです。

それと、ちょっと難しい話ですけれども、本当は、性的な話題に言及しないと、『記紀』の真髄は分からないのです。今の日本の教育の過程では絶対に教えないことですけれども。

コノハナサクヤヒメの、西洋神話にはない性質を帯びた「儚い美しさ」は、一方では実は、イザナミが女陰に火傷をして死んでしまい嘔吐物や糞尿から神々が生まれたり、イザナギがイザナミの後を追って根の堅州国に行ったらイザナミに蛆虫が湧いていたり、アメノウズメが胸乳を出して女陰まで下着をずらして躍ったり、猿田彦大神の前で女陰を開帳したり、そういうことがたくさんあるわけなのですが、そのような女性観と分け隔てがたい、つまりは隣り合わせだという点が重要なのです。

このような女性の行動を、ただ性的な意味でとらえることは誤っているし、そうとらえると、当時の人々の感覚からは大きくずれてしまいます。『万葉集』においても、優美さや儚さや弱弱しさと、滑稽さやしゃれっ気や卑猥さとが、それぞれ独立してあるというようなことがないのです。

これは本来、日本の女性の「良い」性質であったと思います。ところが、今のような超高度・超過密情報社会になると、その「良い」ところが「良くない」方向に出ることがある。それが、私が冒頭で挙げたような、主婦や更年期女性の歪んだ他力本願だと思います。

いつもはごく普通にスーパーに買い物に行って、近所の人とも挨拶し、夫や社会人と失礼のない会話をしているような女性が、いきなり全くの赤の他人である男性霊能者に人生を相談したり、私をもそういう人の仲間だと勘違いしてメールを送ってきて、「誰かに呪われている」と言ったり、「自分の子宮が放射能で汚れたから、私が産む子は障害児だ」などと言ったりする。

これらの女性は、統合失調症などの心の病ではありません。本当に重度の統合失調症の人は、自我による計算された行動は見せませんからね。いわゆる知的障害の女性でもありません。

だから、大切なのは、「自分は元より、清楚さと卑猥さが同居した生き物なのだ」ということを、自分の外側から注視しておく姿勢なのだと思います。自分のうちにある日本的な本能を西洋的な知性によって思考する姿勢が、大切なのだと思います。どちらが欠けても、大変なことになると思います。

その日本的な本能とは、「自らの清楚さと卑猥さとの間、「あいだ・あわい・ま」にある日本の女性の良さ」ということです。それは、日本の四季折々の風景・風土から生まれたものだと思います。

当時の戦争には、多くの若い女性が巫女として参加しています。ちょうどあなた方くらいの女性たちです。軍の先頭に並んで、ちょっと言いにくいですが、いわば「上品な裸踊り」とでも言うのですか、それをやって敵の力を呪力で奪うのです。

裸踊りが上品なことがあるのかと不思議に思うかもしれませんが、

これが先ほどのお話と同じでして、「性的なことが忌まわしいものとして自我にのぼっていない」のです。

ただし、そういった若い女性たちは、何十人と集まって呪力で神々と交信しても、簡単に実際の男の戦闘力に負けるわけです。そこが重要でして、日本の女軍は「弱弱しさ」によって壊滅するということになっているのです。

つまり、女は、腕力では我々男にはかなわないのですが、呪力・魔力では勝てるのです。皆さんは、こんなに鋭い五感と共感覚を持っているこの私にさえ、そういう直感力で勝てるのです。我々男があなた方女性を好きになることの本義は、今でも本質的にはその呪力・魔力の美しさにあると思います。

よく「魔性の女」と言いますね。「魔性」というのは、ほとんどの場合は「男を誘うのがうまい」という意味で使われているようですが、「呪力・魔力を持っている性質」という意味で使えば、「女は皆、魔性の巫女である」のだから、「魔性の女」は同語反復だとも言えます。

ですから、例えば、「美しい」の語源である「美し」には、「美麗・美貌・壮美」という意味と、「可憐・優美・繊細」という意味とが混ざっている。意味が二つあるのではありません。混ざった状態が「美し」なのです。今で言うと、「めんこい」という言葉が近いですね。「めごい」とも言います。今は、それこそ今回の被災地域、東北地方に追いやられて、東北方言と認識されています。でも、東北に限らず、「日本の女はめんこい」という認識でよいのです。

そういう言葉には、やはり西洋と違って、地震・台風などの自然と向き合う中で、最初から人間は自然に勝てない、人間が自然の上に立つことはない、一切動かないような絶対真理もない、ゆえに人間である女性の呪力も自然の域を超えることはない儚いものである、と悟っていた日本人の無常観が込められていると思います。

女性という性がおしなべて持っている呪力、女性がいまだ秘めている動物的な純粋体験によって自然と付き合い、そういった女性の巫女性を神々と人間との間に置いて理不尽な生を生き抜こうという思い。それが、日本人独特の自然観・人間観なのだと思います。

『万葉集』に描かれる日本の女性

そのような自然観と人間観だった最古日本にあっては、女性の清浄・優美で脆くはかない側面と、性的・動物的・原初的側面とが、分け隔てて語られるというようなことがないわけです。

後者は必ず前者を帯びていて、好戦的・暴力的な性質ばかりを帯びるということがない。前者は必ず後者を帯びていて、性的興味を帯びない「たおやめぶり」はない。「たおやめぶり」と言うと、弱々しいばかりと思えるけれど、そうではない。

私は和歌も詠んでいると言いましたが、和歌、というより短歌結社の世界では、万葉集派、古今集派、新古今集派などに分かれていまして、お互いに今でもケンカしているのです。正岡子規以来のケンカなのですけれどね。

どうしてかと言いますと、短歌は写実的に詠むべきか、空想的に詠むべきか、私的文学的であるべきか、純文学的であるべきか、現実の女性を詠むべきか、理想の女性を詠むべきか、などということでケンカになるからです。それで、万葉集は写生だ、写生が一番偉い、だから、写生の短歌・俳句を詠もう、ということになって、今では日常生活に密着した写生の短歌・俳句が超巨大勢力になってしまいました。

しかしですね、私の歌風自体は、一見すると幻想美偏重の新古今集派と言われているのですが、本当はそういうケンカの外に身を置くのだという東洋的・禅的美意識の世界を追究しているつもりなのです。

つまり、そういうケンカにいかに意味がないかということを和魂洋才で詠めないものかと試みているのです。だから、ナントカ派がどうだこうだという和歌のとらえ方は、文学的分析として良くはないと思うのです。

私は、『万葉集』は、ただの風景の写生・叙景ではないという立場です。今時、素人の短歌結社においては、こういう立場に立っている人はほとんどいないようです。『万葉集』の女性は、現実と空想の間「あいだ・あわい・ま」にいます。

女性の呪力とは現実的知性であり、女性の頭の良さとは幻想的巫女性なのです。西洋では、いわば和歌的な女性観や風景観を語るのに、ワーズワースやターナーなどの登場を待たねばならなかった。大自然の風景とか、その大自然と呪力で関わる女性という考え方は、それまでの西洋ではあり得なかった考え方です。そもそも、「風景画は宗教画よりも格下である」という意識のほうが、西洋では常識でした。

しかし、日本では、清浄さと不浄さの合わさった女性の身体美だとか、風景と幻想の合わさった心象美だとかいったものは、『万葉集』の時点で「発見」している。それを阻止する一神教的な自然観・宇宙観がなかったからとも言えます。

日本の女性の持つ独特の感覚、「虫の知らせ」や「巫女的な感受性」や「第六感」といったものが、極度に異性の存在を排除したヒステリックで狂乱なものしか持っていないかと言えば、決してそうではないです。

笠女郎の詠んだ「朝霧のおほに相見し人故に命死ぬべく恋ひわたるかも」や「陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを」などにも、女性の清廉な直覚性が如実に表れています。

逆に、男が女を詠んだ歌にもそれは表れています。例えば、高橋虫麻呂が手児奈という女性を思って詠んだ「葛飾の真間の井見れば立ち平し水汲ましけむ手児奈し思ほゆ」という歌や、菟原少女という女性を思って詠んだ「葦の屋の菟原少女が奥津城を行き来と見ればねのみし泣かゆ」という歌です。

ここには、後の勅撰和歌集のような、美麗繊細で技巧を凝らした歌風は確かにないです。しかし、それだけに、まさに女性の清楚な直覚そのもの、温かい共感覚そのものが、生々しく肉感的に出ているとも言えます。

それに、『万葉集』に書かれている女性の恋愛は、そのまま「日本の女性の動物的・巫女的側面が、のちの繊細な「もののあはれ」や垢抜けた「いき」と、決して非連続的なものではないこと」を示していると思います。

これらを峻別して、風景詩的側面を語るとアララギ派になり、万葉のますらをぶりを語ると賀茂真淵などになるのだと思いますが、それらの感性の源泉は、両方とも最初から我が国にはあると思うわけでして、大陸文化が来ても、渡来人が来て混血しても、遺伝的・民族的に失われなかった縄文人の血というのが、まことに強くはたらいたと思います。

ワーズワースが詩に書きターナーが絵に描いた「自然」や「風景」も、近現代日本人が野蛮と見た沖縄やアイヌの女性の「巫女性」も、かつての日本では生活の中心であり、自然と付き合う上で最重要のものだったわけです。

国家意識の黎明期とは言っても、やはりムラ社会的な意識があり、血縁がある。その他の村は、未だ遠い土地です。女性そのものが「神がかり」する力を持っていて、男のほうがムラの境界を越えて女性に夜這いというのを仕掛けます。これを「男性の交換」と見ると、日本は女系社会だということになるので、そういう説もありますけれどもね。

それにしても、日本の女性は、簡単に名前を口にしなかったのです。ぎりぎりまで名前を言わずに、男を避ける「逃走婚」をやって、処女を守るわけです。婚約者に見つかったら、その後はその一人の夫に従順であるというのが、我々男が愛すべき日本の女性の健気さでしょうね。

こういうことは、「儀式」に思えるかもしれませんが、そもそも「儀式」や「祭祀」というのは、「本能」で生まれますからね。女性が名前を教えないというのは、儀式ではなくて本能です。

我々日本の男性の名前はこの個体としての肉体に付くのですが、日本の女性の名前は今日述べてきた「呪力」、「巫女性」に付く、ということを知っておいてほしいのです。だから、本当は男に名前を教えるというのは、大変な大事件でした。「身も心もあなたに差し上げます」という意味だったと知っておいて下さい。

これは、上古代から戦前までは一貫していたことです。例えば、江戸時代の「宗門改帳」や「人別帳」、その少しあとの「宗門人別改帳」というものを見てみますと、我々男は本名で載っていますが、女性の本名は載っていません。「女」、「妻」、「娘」などとだけ書くか、「どこそこの女」、「誰それの妻」などと書いてあるだけです。

本来、和歌に描かれた通い婚、夜這い婚、逃走婚というものは、各五感として独立した目で見た風景、耳で聞いた音、体で感じた色情だけで成立するようなものではありません。非常に前言語的・アニミズム的・呪術的・共感覚的・直覚的な感性が原点にあると思います。

歌垣・かがい

先ほどから、『万葉集』だの『古今集』だのと述べておりますが、そもそも和歌、特に恋歌は、「歌垣」というものから発祥している可能性が高いです。今回の被災地域あたりでは、「かがい」とも言いますけれどね。当て字としては、女ヘンに「曜日」の「曜」の右を書いて、「歌」と書いて、二文字で「かがい」と読みます。

歌垣・かがいは、男女がお互いに向き合って歌を掛け合うというものなのです。日本語が文字になる以前から日本人の生活の中にありました。万葉集に残されている作者未詳の恋歌群は、上代の歌垣・かがいが源流となって生み出されたものです。

そこには、本当は、完全に文字化されうる人間の感覚、すなわち独立した視覚や聴覚というものは存在しなかったと思われます。言葉・言霊は、触覚でさえあった。人の発する言葉、男女間で交わされる言葉は、自然音・動植物が発する音・音楽などと区別されるものではなかった。

簡単に申しますと、和歌とは「共感覚による男女の語らい、人間と自然の語らい」なのです。今日ここにいらっしゃる皆さんは賢い女性たちばかりですから、体感として分かってもらえそうな気がしています。

ともかく、西洋の言語学的な言葉の意味内容だけではなくて、お互いの言霊・温度・湿度などがピタリと合致することを、男女が求め合って歌を掛け合った。言葉を文字化することは、本来は立体的である人の感覚を平面化すること、本来はとどまることなく流れ変わる音や匂いや温度を、時間を止めていつでも目に見えるようにすることです。

つまり、文字というのは、自分のためにではなく、歴史を作るため、後世に残すために、生まれてきたものですね。このような感覚様態は、万葉人の体と脳には最初はなかったと言ってよいでしょう。そこから、「文字にできない大切なものがある」ということを、「文字で後世に伝える」姿勢が徐々に生まれてきたわけです。

男女がお互いに、根底には性的な雰囲気があることを意識しつつも、一人の異性を獲得するのに長時間に渡って歌を掛け合うというようなことは、無文字文化時代、つまり言語というものが「言葉」「言霊」であった時代から続く、感性と知性、視覚と聴覚とを分け隔てない共感覚による恋文と言ってもよいかと思います。

私は『万葉集』を眺めていますと、当時が、性的な意味で恋愛にただ溺れた時代だったとか、ただの風景の写生・叙景の時代だったといったことは、感じません。一方で、当時の女性の持つ呪術性と直覚性・共感覚性を、ひしひしと感じます。

私は、『万葉集』は呪歌のようなものだと思います。そうかと言って、日本人は風景を見ていなかったのではありません。「口承」や「歌垣」や「万葉の相聞」を、自然に対する共感覚的な畏敬の念を持たない現代日本人が論じるということは、甚だ危険と言うか、困難だと思います。

本来は、風景と異性の中に呪歌性があり、呪歌性がすでに風景と異性とを見るものなのではないか。

『万葉集』ないし上古代の日本語による歌垣は、単なる自然の写実

ないしは印象派絵画のような自然観ではない直覚的で共感覚的な日本人の感性、つまり、視覚や聴覚といった単独感覚に分節化するより前の肉感的・汎神論的な感性によって生まれたものではないか、そういうことです。

日本の女性のこれから

もう時間があまりなくなってしまいましたが、本当は、中古・中世・近世・明治・大正・昭和初期時代の日本の女性にも残されていた巫女性・共感覚性についても、語りたかったのです。それはまた今度にしますね。

平安時代では、女流文学が多く残っていますから、実際に参照しながら巫女性を辿ることができて、臨場感があります。中世以降だと、一見異質に思える貴族・公家の女性と武家の女性と農村・庶民の女性との共通点としての巫女性を辿ることができますし、明治・大正時代ですと、日本的巫女性と西洋的淑女性との葛藤としての日本の女性の心境を辿ることができます。

皆さんは今、大変な時代に生きています。冒頭にも申しましたように、我々男が一人の女性を守り、養うことさえ難しい。もし結婚して、夫婦仲は成功しているのに家計が失敗したとしても、国家が女性を守ることができない。

だから、まじめな男ほど、せめて一人の女性をしっかり養い抜くことができる色々な力が自分に付くまではと、婚期を遅らせるわけです。実際にそのようなあからさまな統計が出ているのに、我々若い男性は、昔のようには、あるいは欧米やイスラム圏のようには、正当防衛的な反国家運動を起こす力もない。

そういう中で、極めて学術の土俵に乗せにくく、我々の現代的自我にのぼせにくい、あなた方女性の「虫の知らせ」や「勘」といったものが生き残っているのは、暗闇の中の光です。

その根底にあるものの筆頭が、女性の「感覚の未分化性」なのだと思います。女性の「感覚の未分化性」の幻惑的な呪術性が、女性の巫女性そのものなのでして、さらにはそのような共感覚が、日本全体、男女両方にあったと私は思うのです。

五感を分節化しない感覚、共感覚、全身感覚は、特に最初から日本の女性の「美的・感性的側面」と「呪術的・動物的側面」とを分け隔てないものとして、上代から平安、そして江戸時代、本当は今に至るまでの日本の女性の感覚様態の本筋であると思います。

そうなるとますます、一見好奇の対象になるかもしれない私の対女性共感覚も、本来の日本人的・男性的な感性として、皆さんにも見直してもらえる余地も生まれてくるのではないかと思っています。

おしなべて男も、共感覚によって自然をとらえ、あなた方女性をとらえていたと思います。「共感覚」、「純粋直観」、ベルクソンの「生命の躍動」、つまり「エランヴィタール」。本当はそんな難しい用語を使わなくても、日本なら「恋」とか「愛しさ」、「いとおしさ」、「惜しさ」、それでいいのですけれどね。

我々男は、あなた方女性を「いとしい」と思う心を失ってきまし

た。それと同時に、我々男が「いとしい」と思えるような女性が減ってきたとも思います。男女両方に、同じくらい責任があると思います。

しかし、僭越ながら、私と同じような発想で和歌などの日本の文化的営為を心から見直して、しかも、何とか日本の女性たちの一部が体に残している「虫の知らせ」をないがしろにせずに美しい感性だと思っている男性がいるなら、私は心より嬉しく思うわけです。実際にいるでしょうからね。

だから、今日、おうちにお帰りになって、私がお話したことをそっくりそのまま鵜呑みにするのではなくて、よく噛み砕いて頭と心で考えてから、恋人さんやご主人がいらっしゃる方は一緒に話し合ってみるのもいいでしょうし、いらっしゃらない方や、あまり恋愛する気持ちが起こらない方は、これからのご自分なりの幸せをお考えになってみるのもいいと思います。

まだまだこれほど未熟で、学んできたことも少ない、たかが二十代の私でも、こういうことを話したくなるのですから、今の高齢者などには、我々若者に大切なことを伝え残したいという抑えがたい欲求があるのではないかと思うのですが、そういう空気が一部の高齢者にしか見られないことに、私は日本の悲しい未来を感じます。

最後になりましたが、今日は、あなた方に出会えて心から嬉しい日でした。ありがとうございました。

※　以上、岩崎純一先生によるご講話内容です。

第三編　三十歳〜三十九歳

第一部　私の「対女性共感覚」を原初的「対幻想」と見る解釈について

二〇一三年七月二十九日　起筆、擱筆、公開

私が持つ「女性の生理現象全般（排卵・月経など）が見える共感覚」について、第三者がどのように見ているかを知ることは、大変興味深い。（この共感覚については、自分で「対女性共感覚」と名付け、拙著でも取り上げた。）

もっともそれは、このような摩訶不思議な共感覚の実在が認められるか否かといったことへの興味ではない気がしている。それは例えば、うつ病者が、自らのうつ症状を認める人と認めない人とに知人や世人が二分されることよりも、自らのうつ症状が世に対していかなる形而上学的または存在論的または現象学的意義を有しているかに関心を持って生きる「自己そのもの」の「うつ性」に関心があるのと、よく似ていると思う。

また、私の「対女性共感覚」が、個人の精神病ないし精神障害であるか、いわば汎男性的（パン＝ダンディズム、パン＝マスキュリニティー）なものであるかが、心底から第三者によって問われるよ

うな機会に、もっと出会いたいとも思っている。

私の場合、私自身のこの共感覚が女性に対していかなる「はたらきかけ方」をしているかについて第三者がどう見ているか、それが重要だと感じている。もっと言えば、繁殖行為・排卵が可能な若い年齢にありながらも必ずしも「私の好みとは限らない」女性に対しても発揮可能なこの共感覚、すなわち、ある意味で「全女性的」・「汎女性的」・「パン＝フェミニズム的」な共感覚の持ち主である男性に、どうして極めて「ごく普通の現代的な」「特定の女性個人に対する」恋愛感情が可能かについて、第三者がいかなる説明を与えるかに、重点的に関心があるのである。

養護学校で多くの発達障害者・知的障害者・身体障害者と関わってこられた松本孝幸先生は、私についての文章をサイトに執筆・連載して下さっている。先生の「岩崎純一」観は、私自身の「私」観に現在のところ最も近いものの筆頭であると思われる。

先生の文章は、私のサイトの「掲載媒体」のページにまとめている。私が以前、「私の共感覚観や人間観について、私以上にうまくお書きになっている松本先生という方がいらっしゃる」旨を知人に語ってみたところ、その知人がまとめて記事が読みたいという要望を下さり、それを機にまとめてみたページである。

例えば、以下のページにある「対幻想」とは、明らかに吉本隆明の語であり、「対幻想論」が意識されている。

「獲得性過干渉」

http://matumoto-t.blue.coocan.jp/noutensi11.html

松本先生の場合は、一言で言えば、私の「対女性共感覚」を「近代男性が男性疎外によって忘却した基礎的な対幻想」、すなわち「性的関係性を有する幻想領域から産出されているもの」であると見ておられる。この見方は、松本先生の私についてのあらゆる文章で一貫していると感じる。

エロス核と対女性共感覚

http://matumoto-t.blue.coocan.jp/kokoro9.html

日本人の「共感覚」傾向

http://matumoto-t.blue.coocan.jp/higuti45.html

心的現象論と共感覚

http://matumoto-t.blue.coocan.jp/ryoukai29.html

「若者宿」と共感覚

http://matumoto-t.blue.coocan.jp/higuti24.html

当然ながら、「対幻想」の一方には「自己幻想」、そしてもう一方には「自己幻想と逆立する」と主張された「共同幻想」が意識されることになる。これらはいずれも「幻想」なのである。ただし、む

ろん、「人間が積極的に作り出すことの〝できる〟負担」としての「幻想」である。

『共同幻想論』によれば、「国家とは幻想」であり、幻想である国家と逆立するものは、「自己幻想」である。「自己幻想」は、「対幻想」と共に絶対に「共同幻想」に収斂されず、当然ながら個人の芸術において最も強烈に表れる。

「対幻想」とは、まず男女関係であり、家族（夫婦・親子）関係である。これは、言い換えれば、我々国民ないし一部のナショナリスティックな思想家が国家に対して感じるロマンと甘美と官能、いわば「国家・母国あるいは制度と見た場合の天皇制などとの間に漠然と感じる、性的ニュアンス」も、自己幻想や対幻想から独立して動いている、すなわち、「国家なる幻想」は「個人の思想」や「男女関係」の転写ないし投射ではなく、それらに対する逆立や齟齬である、ということを意味する。

この点において、対幻想によってしか説明できないはずのリビドーや性的衝動を共同幻想に持ち込もうとしたフロイトが吉本の批判の的となる一方で、マルクス個人の「人間疎外」の思想に、吉本は共鳴することとなるのである。

そうであるから、松本先生も、マルクス思想の大方の部分に共鳴しておられる。中沢新一や三木成夫への共鳴も、同じことであると思う。松本先生に限らず、知人の養護学校関係者も、多くの場合、私の対女性共感覚の中にマルクスへの系譜を見る傾向があるようだ。このような流れはむしろ自然であり、吉本隆明の全盛期当時の相当多くの有識者たちがこのような考え方の流れに乗ったのである。

それに現在、養護学校で多くの発達障害者・知的障害者・身体障害者を見ていらっしゃる立場の方々が、博愛的な観点から吉本やマルクス寄りの思想を示していることは、むしろ自然であると思われる。

僭越ながら、私自身に引き付けて再び言うと、松本先生は私の「対女性共感覚」を、「男女の性交渉自体から最初に疎外された幻想が生じさせているもの」であると見ておられると思う。そうである以上、一見すると「岩崎純一の対女性共感覚という対幻想は、最も自己幻想的で、反〝現代の契約的恋愛・契約的結婚〟的である点において、共同幻想としての日本国とほとんど逆立する」ことになるのだが、ここに、マルクスにはなく松本先生や吉本にはあるかもしれない、そして私にはかなりあるような、「日本的幻想」というものが、立ち現われてくる気がするのである。

自分の対女性共感覚に、ゲマインシャフトとしての「日本」ないし「日本文化」の原初の姿である「歌垣」のなごりの現代における再適応をさえ見ている私としては、ゲマインシャフトを根底から覆すような極端なアナーキズムに近寄るわけにはいかないと感じるのである。

私が自らの共感覚全般や対女性共感覚について、おそらくマルクスでは乗り切れないとすぐに感じた点も、まさにこのような点であると言える。

ここで言う「再適応」とは、対女性共感覚をメスに対して覚える

や否や見境なくメスに交尾を仕掛けた極めて初歩的・動物的な「対幻想」から脱して、「対女性共感覚」そのものは保持しつつ、なおかつ日本の国柄・文化・倫理・社会規範すなわち「共同幻想」においてこれを発揮すべき時を思慮するだけの自我を持った男性としてのあり方、という意味である。

松本先生は、私の「対女性共感覚」を自己幻想ではないと述べておられる。しかし同時に、私の「対女性共感覚」を「原始の感覚」であるとも述べておられる。

私の「対女性共感覚」が自己幻想でないことは、私にとっては確実であるけれども、やはり同様の理解を提示していらっしゃる方の存在は、心底嬉しく思うのである。すなわち、この共感覚は、単に「芸術的」ではあり得ないと自分でも思う。その当初から、現代の日本社会と関係を持っている。

例えば、私は、女性が衣服を着ていても、体表から発せられる何らかの化学物質の量の微妙な違いによって、排卵期かどうかが分かることがある。もちろん、日本国の法律や条例は、このような男性の存在を念頭に置いて制定されていない。「アスペルガー症候群」や「シネスシージア（共感覚）」といった原初的知覚にまつわる語と概念とがほとんど登場しなかった全共闘全盛の時代において、このようなことは議論されようがなかったとも言える。

ところが、法や条例は「共同幻想」の筆頭であって、私の共感覚そのものが反社会的・違法行為でありうるような状況に、出くわさないとは限らない。私にとっては、最初からこの点と向き合わざるを得ない。そうである以上、対女性共感覚は、自己幻想か対幻想のいずれかであるが、結果的に自己幻想ではない。

吉本は、そもそも生命ないし有機体生物そのものを自然界からの「疎外」であると見ている。つまり、生き物は幻想に生きているのである。その意味では、どの発達障害者や知的障害者や精神障害者でも、疎外以前よりは「高度な」幻想をどこかで持って生きている。そして、オスが（私のように）メスの排卵感知能力としての「恋」を覚えたときに、対幻想の萌芽が見られることになる。松本先生は、この点をほとんど理解して下さっていると感じる。

「自己幻想ではなくて、かつ原始であるようなもの」とは何か。もっと簡単に言えば、「我々男性にとっての最初の他者（母親・意中の女性・恋人）である第三者にさえ全く理解されないというほどには自己中心的ではない幻想」のうち、「最も原初的で、最も特定の他者（親・知人・組織・国家）が意識されない非共同幻想的な幻想」とは何か。それが「対女性共感覚」であるならば、先に書いたような、「汎女性主義的」でありつつ「特定の女性に対して恋愛的である」ことが、確かに可能となる。

このような私の「対女性共感覚」分析があるとするならば、全くマルクス主義者ではない私にも、自然と受け入れられるのである。

ただし、このように見ると、コスモポリタニズムに近寄りながら、それでもやはり「日本的」であった宮沢賢治の態度は、吉本よりもフロイトに似ていなくもない。私自身が、吉本よりも宮沢賢治やフロイトのほうに共感を覚えるのは、このような点である。同時に、

私の親世代や少し上の団塊世代・全共闘世代を見ていて、常々物足りないと感じる点は、自らの積極的幻想に自覚的でないという点であるかもしれない。

すなわち、「共同幻想は、必ず男女の対幻想を基礎としている」というのが私の考えである。吉本の『共同幻想論』は、「国家という幻想」に対峙するものを「性的関係性」とした点において独創的で、男女の性的要素の欠落したマルクスの思想を補完していると言えるが、国家という共同幻想に男女の対幻想はほとんど流れ込まないとした点において、むしろ松本先生が認めておられるような私の「対女性共感覚」の居場所が共同幻想領域には存在しないことを表明しているように思える。

ちなみに私は、オウム真理教に肯定的発言や著述をおこない始めた頃からの吉本や中沢新一には、著しい違和感を覚える。大江健三郎についても、ある時期から同様の違和感を覚えている。

私は、生意気な若造かもしれないが、自分の対女性共感覚は、そんな新宗教と（吉本が自分でそう呼んだ）「左翼」思想との結びつきから独立しているべきであると思うし、最初から独立していて別物であるとも思っている。

私は今でも、これらの方々と三島由紀夫のどちらかの思想を採れと言われたら、三島由紀夫のほうを採りたく思う。あるいは、単に川端康成の小説を採りたいとも思う。あるいは、戦後思想を見るよりも、まず九鬼周造や岡倉天心から始めなければ意味がないとも考える。自分の対女性共感覚を、九鬼の「可能的関係」や岡倉天心の茶の精神において考えるほうが、よほど好きである。

これは、好みの問題でもあるかもしれないが、論理的にそうであるような気もする。吉本が「左翼」勢力の顛末を「プロレタリアートの解放戦争」と呼んだことに意図的にちなんで言えば、私が言わんとしている対女性共感覚とは、常に「保守的」であり「日本的」であり「右派的」であると思う。しかし、私は自分では「ど真ん中」であると思っている。